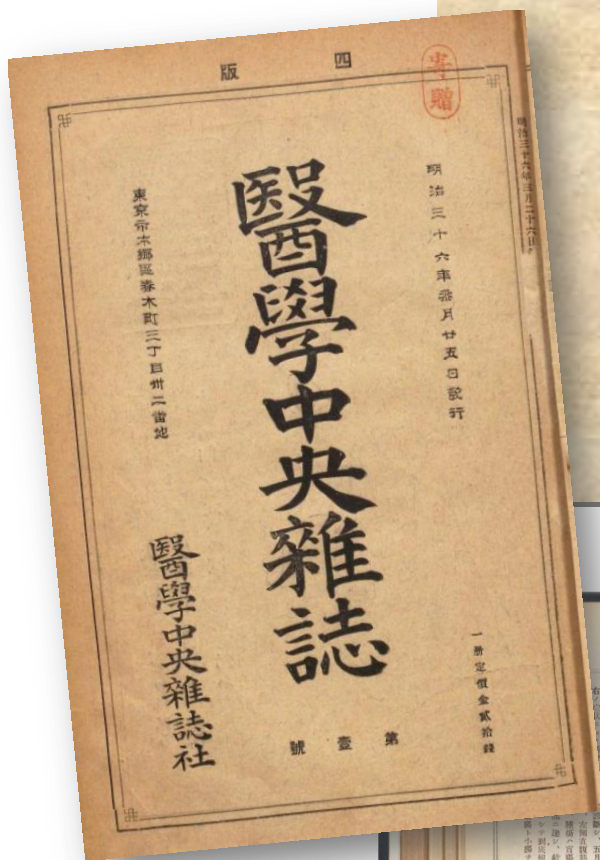


日本最古の医学情報データベースに携わった 養育院附属病院院長

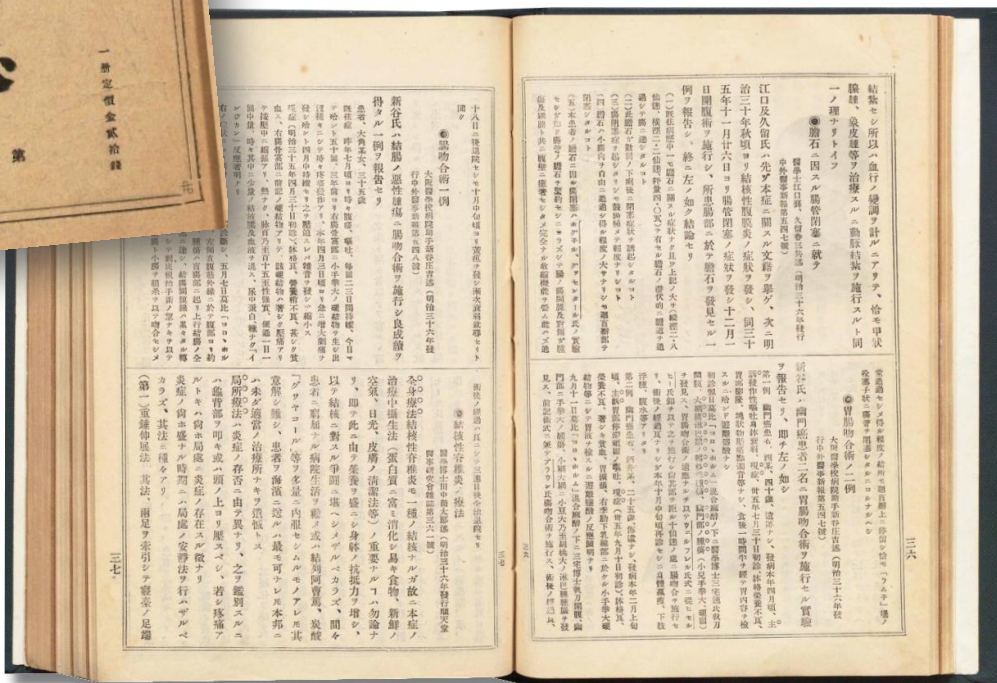
宮本孝一 (老年学情報センター)

コピー機・パソコン・インターネットのない時代に、文献(医学雑誌掲載の医学論文)の収集や引用の作業をどのようにやっていたのか、若い方には想像もできないのではないのでしょうか。洋雑誌には INDEX MEDICUS、和雑誌には**医学中央雑誌**という抄録誌があり、病院内図書館の一角を占拠していました。医師は、診療の合間や夜間、これをひもとき、筆写するのが、学会に発表するときのはじめの作業でした。

この「医学中央雑誌」を発行していたのが、尼子四郎・富士郎親子でした。尼子富士郎先生は、世田谷区の浴風会という老人施設を経営しており、老人病の泰斗でした。昭和47年、当医療センターの前身「養育院附属病院・老人総合研究所」が新築され大々的に出発した時の村上元孝院長、亀山正邦副院長、蔵本築部長、松下哲医長らや、現理事長の松下正明は、何れも尼子先生の所で、老人学を研鑽した方達でした。また当時の養育院附属病院の医師たちも医学中央雑誌の抄録づくりを手伝っています。(文責 稲松孝思)



医学中央雑誌 創刊号



尼子四郎



尼子富士郎

日本一古い雑誌データベース 日本医学関連専門誌(約三〇〇〇誌)の掲載記事・掲載論文(三六万件)を探す索引データベースに、**医学中央雑誌(医学WEB)**というデータベースがあります。日本の医師・看護師など医療専門職が、専門分野や医療業務に関する最新の情報を入手するために、なくてはならないデータベースで、東京都健康長寿医療センターでも職員が日常的に使用しています。かつては冊子でしたが、現在はインターネットを通じて、施設内のパソコンで使用します。医学中央雑誌は、約一〇年前、明治三六(一九〇三)年に一人の医師が発行し始めました。医学情報の索引誌としては世界で二番目に古く、日本で一番古い雑誌データベースです。

夏目漱石の家庭医が始めた「医学中央雑誌」

夏目漱石「吾輩は猫である」に登場する甘木先生という人物のモデルになった医師**尼子四郎**が、当時の医学先進国ドイツの医学雑誌索引誌に刺激を受け、千駄木にあった自宅を作業場にして「医学中央雑誌」の編集・刊行を開始しました。尼子四郎は近所に住んでいた夏目漱石の家庭医もしていました。

日本の高齢者医療の草分けと「医学中央雑誌」

医学中央雑誌刊行から二五年後、その刊行事業は尼子四郎の息子**尼子富士郎**に継承されました。尼子富士郎は、関東大震災で行き場を失った高齢者を収容した東京・高井戸の施設**浴風会**の医長を務める医師で、浴風会の医療は日本の高齢者医療の先駆けとなり「老年医学の発祥の地」と言われています。

尼子富士郎の作業

医学中央雑誌の編集とはつぎのような作業でした。

国内で発行された医学関連領域（医学、薬学、歯科学、獣医学など）の雑誌や図書を購入し、論文、学会発表のすべてを読んで採択、非採択を決める。採択が決まると、科目別分類をする。抄録が必要なもの、抄録を作る。これらを編集し、

校正し、索引語を指定する。富士郎は浴風会の院長としての仕事や、東京大学の老年医学の講義も行いながら、この「医中誌」発行の全ての工程を一人で確認し、とくに論文と学会発表の採否、科目別分類、最終校正においては全く一人でやっていったという。グラブリは印刷所から毎日数十ページ届くため、これらの校正に毎日数時間を要し、この日課は七八歳で亡くなる直前まで続けられた。（斎藤晴恵 尼子四郎と夏目漱石 医学図書館 五三巻一号より）

尼子富士郎の死後、富士郎の自宅でのこの作業を継承したのが、当時、養育院附属病院の院長に就いていた**村上元孝**でした。



養育院附属病院
村上元孝院長

尼子富士郎の事業を継承した、新・養育院附属病院長

終戦後しばらくは、昭和四七（一九七二）年、一般国民も対象にした高齢者医療専門病院として再スタートしました。新・附属病院の初代院長に就任したのが**村上元孝**です。

村上元孝は昭和三九（一九六四）年に医学中央雑誌刊行会の理事に就任し、医学中央雑誌の発行に関わっていました。またそれ以前に昭和三四（一九五九）年の日本老年医学会設立にも関わっていました。

村上元孝も尼子富士郎と同様に、日本の高齢者医療の開拓者でした。

村上元孝は昭和五九（一九八四）年まで院長を務めて「世界にも類を見ない、研究機能を持った老人専門病院」づくりをめざし、また、医学の世界では、日本老年学会や国際老年学会を会長として開催しました。

村上元孝は、養育院附属病院長在任中の昭和五〇（一九七五）年に医学中央雑誌理事長に就任、尼子富士郎の家内工業的といえる医学中央雑誌の発行作業を引き継ぎ、八年後には、コンピュータを使った編集をスタートさせました。

医学中央雑誌の電子化

「コンピュータ」編集を導入した村上元孝は平成元（一九八九）年に亡くなりましたが、その後も医学中央雑誌の電子化はさらに進展し、CD-ROM版発行を経て、平成二二（二〇〇〇）年にはインターネットで使用する「医中誌WEB」が始まりました。

明治三六年から始まった冊子は、平成一四（二〇〇二）年まで刊行されていました。

現在、日本中の医療機関・研究機関が医学情報の収集に使用している医学中央雑誌は、インターネット版「医中誌WEB」です。



渋沢栄一銅像

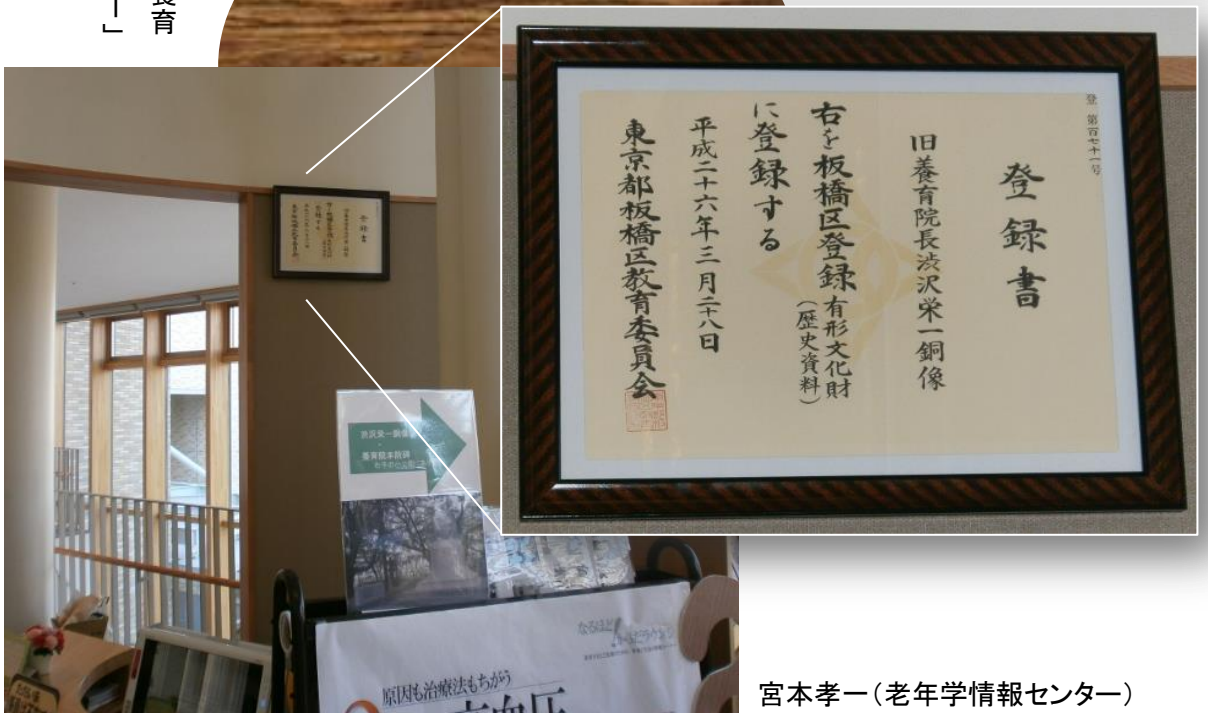
板橋区の有形文化財に登録

健康長寿医療センター敷地内に立つ渋沢栄一銅像が、平成 25 年度板橋区登録有形文化財(歴史資料)に登録されました。

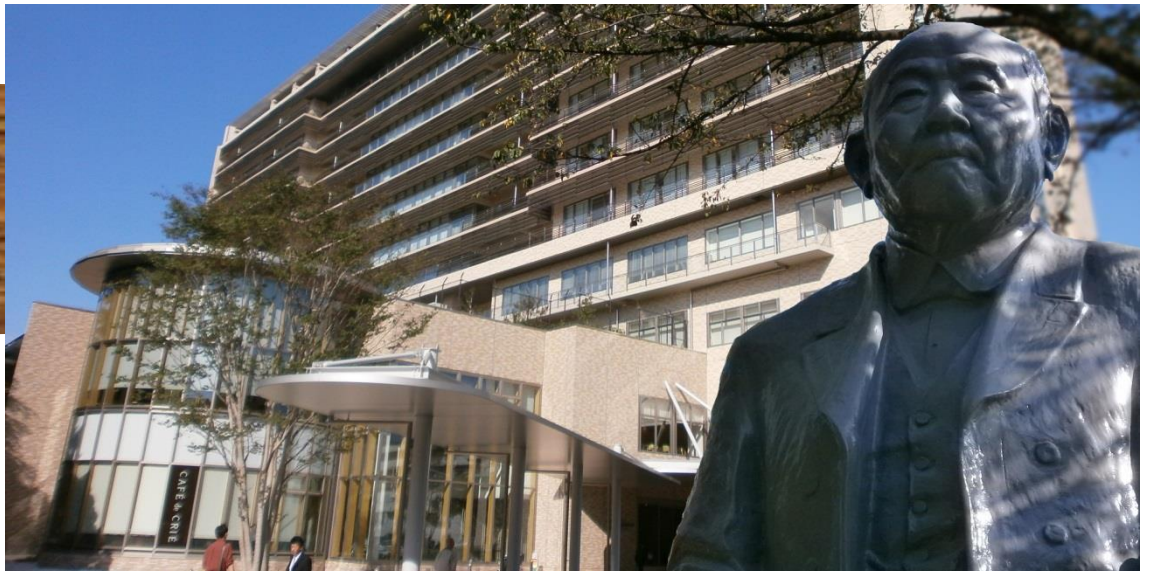
4 月 14 日(月)、センター理事長室で、板橋区教育委員会から松下理事長に登録書が手渡されました。



登録書は、二階「養育院・渋沢記念コーナー」に掲示しています。



旧養育院渋沢栄一銅像とは



銅像は、関東大震災による養育院大塚本院崩壊に伴い、大正十二年、既に分院があつた板橋へ本院移転が決まったことを契機として、十三年に東京市長永田秀一郎らが発起人となり「渋沢養育院長銅像建設会」を設立、六五〇名余りの寄付を募り製作し大正十四年（一九一五）十一月十五日、本院完成にあわせて建立しました。

当初は養育院本院の事務室があつた、現在の板橋第一中学校内に建てられました。その後転々と位置を変えています。

昭和十六年に金属供出のため台座から下ろされ、代わりにコンクリート製像が台座に置かれていました。

戦後昭和三二年の像移転の際に元の銅像に戻され、平成二五年六月東京都健康長寿医療センターの開院を

機に現在地へ移設しました。

渋沢栄一像は、帝展・文展の審査員も務めた彫刻家小倉右一郎製作、完成当時は高さ十六尺（四・三メートル）、方二〇尺（五・四メートル）の花崗岩の台座に、高さ一〇尺（三・七五メートル）、重量四八〇貫（一・八トン）の青銅製で作られ、その姿はフロックコートにソファアに座つた坐像です。

（板橋区ホームページ「旧養育院渋沢栄一銅像」より）





健康長寿医療センターのヒポクラテスの木について

ヒポクラテス(紀元前 460 年頃～紀元前 370 年頃)は、古代ギリシャの医者である。医学を原始的な迷信や呪術から切り離し、臨床と観察を重んじる経験科学へと発展させたことが最も重要な功績として挙げられる。また、医師の倫理性と客観性について『誓い』と題した文章が全集に収められ、現在でも『ヒポクラテスの誓い』として受け継がれている。これらヒポクラテスの功績は古代ローマの医学者ガレノスを経て後の西洋医学に大きな影響を与えたことから、ヒポクラテスは「医学の父」、「医聖」などと呼ばれる。

そのヒポクラテスは、晩年、生まれ故郷のコス島のプラタナスの木陰で、若い医師達に医の道を教えたといわれる。そのゆかりのプラタナスの子孫が巨樹となって、19世紀のヨーロッパで最も有名な木となり、「ヒポクラテスの木」とよばれていた。今日、空洞の多い老樹となっているが、その葉(ひこばえ)2本が大きく育っており、親の老樹をしのぐ勢いで繁茂している。

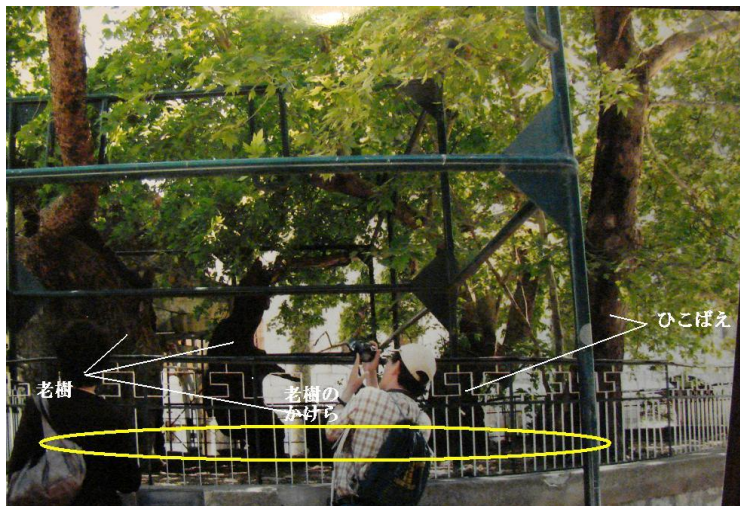
この「ヒポクラテスの木」を始めて日本に持ち込んだのは、慶応大学卒業の産婦人科医篠田秀男先生である。1955年にコス島を訪れた際、その種を持ち帰り、日本で発芽させ、その実生苗や挿木苗をご自分の病院や母校の慶応大学、山形県の施設などに植えたのである。

1966年、元日本医史学会理事長の新潟大学の整形外科医、蒲原宏先生が、同様にプラタナスの種を持ち帰り、発芽させ、あちこちに挿し木苗を配布している。

1970年、東大の沖中重雄先生は、医学会総会の会頭であったとき、東大紛争後の医学界の混乱を深く案

じ、ヒポクラテス展を催した。これを担当した東大の緒方富雄先生は、そのとき以来、ヒポクラテスに深く思いを致し、篠田株、蒲原株を入手して育てていたが、1976年、ギリシャの Doxidas 教授経由で、「ヒポクラテスの木」ゆかりの苗を入手、本郷の東大医学図書館の前に植え、説明碑を建てている。今日、38年を経て、医学図書館の前に巨樹となって育っている。篠田株も本郷の敷地内のベルツ・スクリバ銅像の近くに植えたが、2000年頃には枯死して、説明碑のみが残されている。蒲原株は沖中先生が長く療養されていた虎ノ門病院の川崎分院で育てられ、今日、医師教育のシンボルとなっていたが、2013年に虫害で枯死した。

1977年、日本赤十字百周年にあたり、小林隆院長は、ギリシャ赤十字から苗と種を入手、日赤中央病院で増殖し、赤十字病院を中心に広く配布している。その後も何人かの先生がコス島を訪れるたびに苗木を入手し、医学教育のシンボルとして育てている。



2005年、ギリシャ・コス島にて、著者撮影

最盛期、黄色輪の樹幹であったが、巨大な空洞ができ、樹皮でかろうじて立ち、鉄棒で支えられている。2本の葉(ひこばえ)が大きく育つ。



東大医学図書館前の、樹齢30年余のヒポクラテスの木。遠くに新校舎の塔が望みできるが、医学のシンボルの医神・アスクレピオンの杖が描かれている。

日本の“ヒポクラテスの木“						2010. 4. 10.			
	篠田	蒲原	緒方	小林	ギリシャ協会	原田	武田	大田・富樫	不明
記載	42	35	1	119	22	5	5	8	2
生存	17	20	1	43	13	2	3	7	2
踏	2	5	1	11	2				
アソ	5	12		23	9		1	7	
ネット	10	2		6	2	2	2		2
枯死	15	10		20	5	3	1	1	
不明	10	5		56	4		1		

2010年4月以後、ネット上に、蒲原株22本程度、武田株3本程度の記載あるが、詳細不明

ごとの本数を一覧表に示した。その後、長岡の星先生、虎ノ門病院の先生が積極的に配布している。この調査のとき、それを導入するときの関係者の医学の現状、教育についての深い思いが伝わってきた。

私も2009年に、縁あって日本ギリシャ協会から苗を入手し、育成に努めたが、心無い人？に傷つけられ、数年で枯死してしまいました。

今回、新施設の建設に際して、再チャレンジを試みた。たまたま本郷の東大・緒方株の実生苗を見つけ、関係者のご理解を得て、2012年秋に高さ30cm位の苗を入手、リハビリテーションのスタッフに鉢植えにして育ててもらっていた。新施設移転後は、屋上庭園に移植していたが、樹勢もしっかりし、屋上の屋根を貫く勢いになってきたので、地上に降ろすことにした。移植に最適の4月、病院玄関に移植した。背丈158cm、根回り3cmの若い樹である。ヒポクラテスの有名な箴言の緒方訳を掘り込んだステンレス板を配置した。

また、板橋看護専門学校の新築にあわせ、表の武田株のヒポクラテスの木の苗を入手することができ、新しい敷地に植えた。武田株(京都の武田病院の理事長が入手、配布したものの挿し木苗を旧知の三重大の名誉教授からいただいたものである。

「ヒポクラテスの木」は中東原産のプラタナスであり、アメリカ原産のアメリカプラタナス、交雑種のモミジバプラタナスとは葉の形、幹の様子、実のつき方などの表現形に違いがあるが、詳細は稿を改めたい。

この10年近く、あちこちの施設の「ヒポクラテスの木」を見る機会を得た。それぞれ、若干の違いがあり、実生の場合の遺伝子変異、枝変わり、植えられた土地の条件、樹齢などに起因すると思われた。医学倫理も、時と場所を乗り越えて、本質的には普遍的なものであろうが、時代ごとに、土地ごとにいささかの差があり、それを反映するものと考えたい。

プラタナスの寿命はおよそ500年と考えられており、現在のコス島の老樹も、すでに5代目くらいなのであろうか。すでに老年期に達しているが、勢いよく葉(ひこばえ)が二本、次の時代に向かって育っている。医の道に思い惑うこと、悩み苦しむことは、医学に携わるものの必然である。そのときに、自然とともにある医学の本質を、考え続けるきっかけにしていればと思っている。あちこちの医療関連機関で「ヒポクラテスの木」を育てる人たちの共通の思いであろう。(稲松孝思)

2005年ころ、ある思いがあって、アンケート調査、ネット情報の収集により、日本国内のヒポクラテスゆかりの木について調査をした。日本国内で100本以上のヒポクラテスの木が育てられていることが判明し、それらの木の由来と系統を日本医史学会に報告した。その後の調査情報も含めて、入手者の系統



2012年秋入手 2014年4月定植

Vita brevis, ars vero longa;
sed occasio momentosa,
empirica periclitatio periculosa,
indicum difficile.

ヒポクラテスの木
生命はみじかい
技術はながい
機会は去りやすい
経験はだまされやすい
判断はむずかしい
—ヒポクラテスの箴言より—
緒方 富雄 訳

ヒポクラテスの箴言

ヒポクラテスの木の植物学

「ヒポクラテスの木」は、中近東原産で、ギリシャやトルコにふつうに生えているプラタナス (*Platanus*) の木であり、語源は大きな葉: ギリシャ語の *platys* (広い) に由来する。ソクラテスもプラトンもその木陰で講義したといい、ヒポクラテスだけではないようだ。花言葉は「天才」であるのはこのためだろう。日本名はスズカケノキである。スズカケの語源は鈴をぶら下げたような実がなるからと言う俗説があるが、誤りである。スズカケを漢字で書くと「篠懸」で、山伏などの旅装束の、上に羽織る衣装の胸元のぼんぼんのような糸玉のことである。能や歌舞伎の「安宅」などで、義経や弁慶の装束のあの玉である。近縁種のアメリカスズカケノキは、英語で *button tree* とよばれ、よく似た語源である。

白亜紀のヨーロッパの植物化石にプラタナス属と思われるものがあるらしい。大陸移動で、ユーラシア大陸とアメリカ大陸が分かれる過程で一族は双方に引き裂かれたらしい。それぞれの土地で独自に隔離進化したものが、中近東原産のスズカケノキ (*Platanus orientalis* Linn.) と、北米原産のアメリカスズカケノキ (*Platanus occidentalis* Linn.) であるようだ。前者は葉の切れ込みが深く、多数の実が房状に付き、樹皮は大きく剥がれ白い幹が裸出するが、後者はその逆である。

17世紀のプラントハンターの時代に、英国の植物収集家の庭で両方を並べて植えておいたら、その合の子のモミジバ スズカケノキ (*Platanus acerifolia* Wild.) ができたという話が本に書いてある。モミジバ スズカケノキは幹の肌が美しく、公害によく耐え、剪定にも強いいため、品種改良が加えられ、英国で庭園樹、街路樹として広く用いられ、その後世界中に広がり、いまや、世界4大街路樹の一つと言われている。

日本にスズカケノキが導入されたのは、明治9年の小石川植物園がはじめてで、高さ30mを越える3種の巨樹が一望できる。明治30年代には、西洋式庭園に欠かせない樹種として、目黒の林業試験場、新宿御苑、日比谷公園に導入され、モミジバ スズカケノキの子孫が品種改良されあちこちの街路樹に多用されている。

都内の街路樹の多くは、このモミジバ スズカケノキである。同じモミジバ スズカケノキであっても、地方により利用される品種は異なり、葉の形や樹皮の様子はさまざまである。

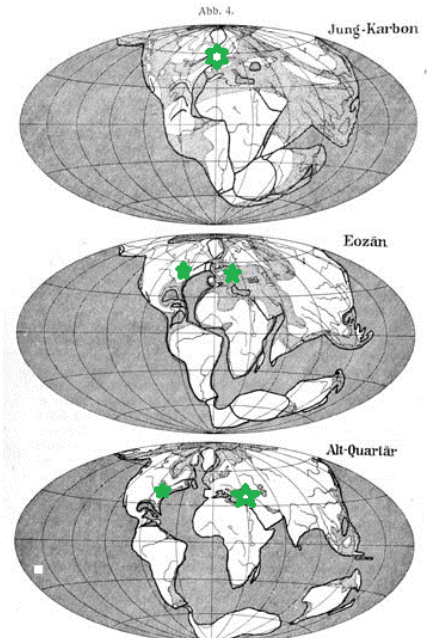


小石川植物園の3種のプラタナス。

剪定に強いいため、秋には極端な剪定を受け、断端がコブの様になり、冬場には骸骨のような樹形で、街路に林立することになる。

剪定しなければ、のびやかに枝を伸ばして、高さ30mを超える巨樹となる。街路樹とは全く異なる樹形である。

なおロンドンの大時計台 (ビッグベン) の周りの緑はほとんどこの樹木である。



ウェーゲナー『大陸と海洋の起源』第4版(1929年)より、著者改変

上段: 白亜紀: 原始プラタナス
中下段: 大陸移動。隔離進化

18世紀イギリスで交雑種: モミジバプラタナスができる。世界で品種改良公園樹、街路樹に



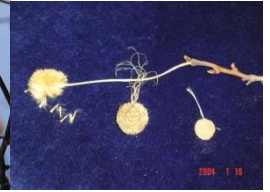
この3種の葉の形を写真に示した。葉の切れ込みが深く形の整っている左上2枚がプラタナス、切れ込みが浅く形の不正な右上がアメリカ プラタナスの葉である。モミジバ プラタナスは下段のものであるが、個体ごとの多様性が大きく、前2者の中間のいろいろな形のものがある。葉の大きさや厚さと固さ、黄葉時の葉の色つやにもバリエーションが大きい。

プラタナスは雌雄同株異花である。6月頃に地味な花をつけ、秋には堅い集合果となる。冬中ぶらぶら枝に下がっているが、次第に落果して、踏まれて

粉々になるか、風に飛び散って、タンポポのような小さい種が風に散る。

写真の①は雌花、②は雄花、③は一冬越した集合果、④は種が飛び散った後の柄である。

一つの柄に、花・



実が4-6個つのが写真に示すプラタナスで、1個がブーランとぶら下がるのがアメリカ プラタナス、2個ついてサクランボのような形になるのがモミジバ プラタナスである。集合果は、崩れるとタンポポのような種となり、風に乗って飛び散る。

樹皮ははがれ、白く裸出するのがプラタナス、樹皮の剥がれにくいのがアメリカ プラタナス、幹の中間から上のほうで剥がれてくるのがモミジバ プラタナスであるが、個体差はかなり大きい。

左の写真は、東大のヒポクラテスの木の姿、集合果のなり方は、植物学的には、ギリシャのコス島の「ヒポクラテスの木」と同じ、中近東原産のプラタナスである。



スズカケノキ

アジア西部、ヨーロッパ南東部、ヒマラヤ原産。
葉の切れ込みが深い。
樹皮は大きく剥げ落ちる。
実は串団子のように2~6個つく。



アメリカスズカケノキ

北アメリカ原産。
葉の切れ込みは浅い。
樹皮はあまり剥げない。
実は1個ずつ。



モミジバズカケノキ

スズカケノキとアメリカスズカケノキの雑種と推定されている。
樹皮が剥げ落ちて、まだら模様になる。
実は2個づつが多い。



あちこちに植樹されている日本のヒポクラテスの木には、挿し木苗で増やされたもの、実生苗で増やされたものが入り混じっており、同一クローンではない。アメリカプラタナスの遺伝子が入り込んだヒポクラテスの木も混在しているようだ。遺伝子の川の不思議を感じる。

(稲松孝思)



養育院80年史より—渋沢院長の功績

社会福祉事業としての『養育院』事業は、多くの人の公益に対する思いがより合わさってできているものであろう。ことに、渋沢栄一の半世紀を超える、養育院事業の維持・発展に尽くした功績には計り知れないものがある。養育院80年史に、その功績を総括した文章があるので紹介する。その中で、青淵回顧録を引用して、渋沢の社会事業感が述べられている。いわく、「人間は本来平等のものである、然るに一方は飽食してなお余りあるのに、一方は飢餓に瀕して苦悩を訴えている。この場合には他人は他人で、自分は自分であるといつて、少しもおもいやりの心を起こさなくてもよいものであろうか・・・」。100年以上前の言葉である。

アダムスミス風の考え、ハイエク風の考え、リーマンショックの時代を経て、21世紀の今日、改めて渋沢の思想が、ドラッカーなどにより再評価される理由である。

七分積み金制度を作った松平定信（白川楽翁）の為政者としての覚悟を記した、吉祥天に対する起請文の写しを、自身の讃を付して養育院長室に掲げた渋沢の思い（展示中・・・）

大久保一翁の、「養育院捷書」の冒頭に付した、人間の基本理念としての互助精神（パネルに記載）・・・そのような人格のより合わさったものとして、養育院事業は存在しえたのであろう。

本院創立以来昭和六年一月逝去されるまで実に五〇有九年間、本院事業のため、ひいては本邦社会事業発展のため尽瘁された故渋沢栄一院長の功績は偉大なるものがあり、本史冒頭からその献身的努力と高邁なる人徳については縷々述べてきたが、こゝに故渋沢院長の人となり及び本院関係の主なる事績について略述する。

天保十一年二月一三日武蔵国榛沢郡血洗島村（埼玉県大里郡八基村）に出生、後に一橋藩に出仕し、慶応三年フランス万国博覧会に水戸の民部大輔の差遣に際してこの随員として同三月一行と共に渡仏した。明治元年一月帰朝、既に大政を奉還して静岡藩主であつた徳川家に仕えて勘定組頭に就任されたが、明治二年一月新政府に出仕を命ぜられ大蔵省租税正に就任、以来累進して大蔵少輔となり、明治草創期の我が国財政の確立に貢献されたが同六年五月官を退き第一国立銀行の設立に意をそゝがれたのである。

越えて明治七年五月一日静岡藩時代の旧知であつた東京府知事大久保一翁氏から共有金（楽翁公創設の七分積金）の取締を托され、管轄會議所頭取になり同時に養育院事務を管理されることとなつたのである。即ち本院事業に関与された端緒であつた。

其の後に於ける事績については既に前各章において記述された通りであるが大綱的に述べるならば、先ず明治一五年東京府会に養育院廃止論が提議されるや、この阻止に百方奔走しこれを阻止し得たが、明治一八年六月限り養育院事業を地方税支弁から廢止することに決定され、院の

存続が危うくなつた際、この存立に尽率して同一八年二月有志と共に、院の経営を委任されたのである。また後援団体である婦人慈善会の設立、演劇慈善市の開催等院資の増殖に努められた。明治二二年東京に市制が施行され、院長の申出により事業並びに財産の全部を引継いだ、そして本院委員長に推進され従前通り院務を統轄されたのである。

明治二七、八年の日清戦争前後市内に多数の浮浪少年が放浪し、感化救済の必要が痛感されたので同三年七月院内に感化部を設置し、更に別置する必要を認め北多摩郡井之頭（現、三鷹市井之頭公園）御料地を拝借し、同三年三月感化部施設として井之頭学校（現款山実務学校）を創設された。

明治四一年一〇月、中央慈善協会会長に就任、翌四二年三月西巢鴨町に普通児童収容施設として巢鴨分院（現、石神井学園）を別置し、同年虚弱児養護のため千葉県船形町に安房分院（現、安房臨海学園）を創立、更に大正三年北豊島郡板橋町（現、板橋区板橋町）に肺結核療養所として板橋分院（現、本院分室）を設置し市の療養事業に先駆する等、養育院分化施設を發展拡充された。

その他大塚本院の板橋町移転、大震災の為ほとんど全潰した安房分院の復旧工事の完成等、その功績は枚挙にいとまがない。

又養育院入院の癩患者の治療に關連して、日露戦争前後から癩療養所の設立運動を起し、癩予防法の制定、道府県連合癩療養所設置の促進となり、昭和六年一月癩予防協会を創立し会頭に就任、更に方面委員事業についても同年五月全日本方面委員連盟会長に就任され救護法の実施促進に努力された。

こゝに渋沢院長の社会事業観を青淵回顧録から摘記する。

「人間は本来平等の者である、然るに一方は飽食して猶余りあるのに、一方は饑餓に瀕して苦悩を訴へている。此の場合には他人は他人で、吾人は吾人である」と云うて少しも惻隱の心を起さなくても可いものであらうか。私は矢張り社会政策の上から云うても、貧窮の為に漸く不良の心を助長して社会に害悪を及ぼす様な人々を慈善事業に依つて之を未然に防止する時は、他日斧を用いなければならぬ者も嫩葉のうちに摘み取つてしまふ事が出来ると思ふ……中略……慈善という事は敢て養育院に限つた訳ではないが、養育院は慈善の爲めに作つたのであつて、然かも非常に重大な社会政策を意味して居るものである。近頃社会問題の研究が頗る盛んになつて来たのは喜ばしい傾向であるが、それについてこの慈善ということに就いて、真先に社会上且つは経済上の問題として

研究して貰いたいと思ふ」（青淵回顧録）

又院長は明治三三年男爵を、大正九年子爵を授けられたが、昭和六年一月一日九二才の高齡で逝去された。

澁沢院長の銅像建設

大正一三年二月末「東京市養育院長澁沢子爵の功績を記念する為め、其銅像を院内に建設し、同院に寄附するを目的」とする「澁沢養育院長銅像建設会」が設立され、澁沢院長の徳を偲ぶ為院内に建設し本院へ寄附されることになった。

この建設会の発起人は当時の東京市長、同助役、東京市会議員及び養育院常設委員一同、並に養育院幹事等であり、同会役員は次の通りであった。

会長	中村是公	専任理事	小坂梅吉
理事男爵	大倉喜八郎	理事	田沢義錦
理事	安東正臣	同	大岩豊吉
同	田沼義三郎	同	三井元之助
同	岡田忠彦	同	天利庄次郎
同	莊 清次郎		

各界有志に設立趣意書を通じて寄附を募り、同一四年三月中、彫刻家小倉右一郎に依頼して銅像の製作及び附帯工事の造営に着手し、同年一月初旬に一切の工事を竣工し本院に寄附され同月一五日除幕式を行った。

この像は青銅坐像で総高さ一〇尺、重量四八〇貫、台石は花崗岩で高さ一六尺平面方二〇尺の巨大なものである。

なお、この建設の収支決算概要は次の通りであった。

収入	一、金三三、〇四二円九六銭	寄附金並に利子収入
支出	一、金二八、四〇〇円	工事費
	一、金四、六四二円九六銭	雑費

この銅像建設に対して、寄附された人員は六五〇人で、寄附の口数は六、五四八口（一口、五円）、寄附金額は三三、七四〇円に達した。

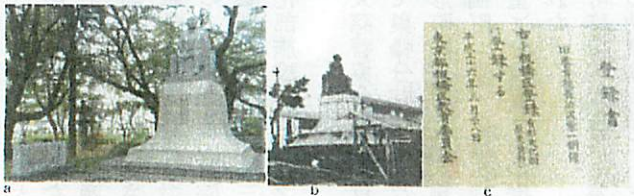
設立趣意書

終始一貫其首腦者として拮据經營の重責を負ひ、前後半世紀間、無慮六万の老廃窮孤の薄倖なる同胞を救護し、帝都の社会事業として規模実質共に能く東京市の面目を立つるに至りしもの、一に子爵の熱烈なる努力の資にして、我等市民の深く之れを多として曰まざる所なりとす、而して今や同院は時代の必要に迫られて、多年計画し来りたる改良拡張の工事成りて、市内小石川旧所在より郊外板橋町の新築場舎に移転し、面目亦た往日の比にあらざるものあり、而して此機会に於て、吾人同志胥謀り子爵が終生の事業として努力せらるゝ養育院の構内に其銅像を建設し、一は以て其功績を記念するの微意を表し、他は以て後人をして永しなへに其徳を偲ばしめんとす、吾人の企望豈に徒爾なりと云ふべけんや。

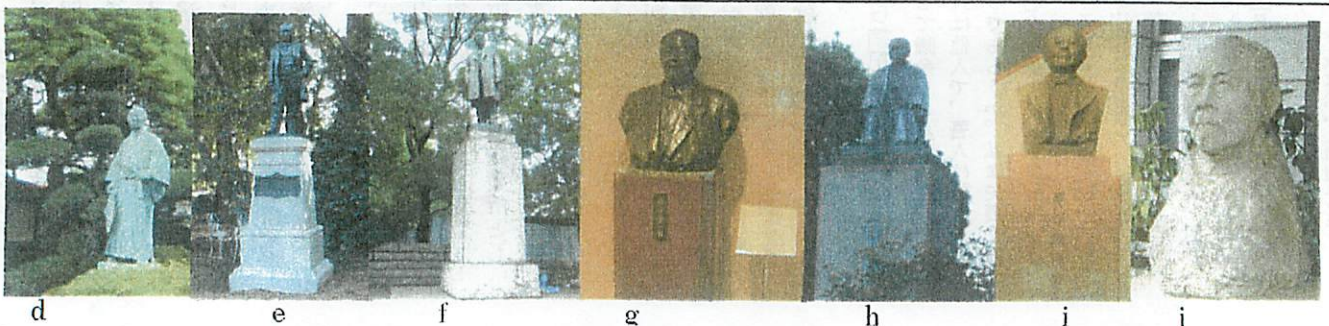
以来この銅像は、院の至宝だけではなく、本邦社会事業史上の記念物として、本院事務所前（現、本院南側用地）にその姿を見せていたのであるが、たまたま、昭和一六年一二月、起つた第二次世界大戦中、戦争資材の一部としてこの銅像も回収を余儀なくされ、銅像に代る同型の石像を設置し今日に至つてゐる。

「旧養育院の澁沢銅像」は、様々な経緯を経て、今日、新しいセンターに向かって微笑みかけている。ブロックコートを着てソファーに腰掛け、好々爺然と施設の行く末を見ているが、平成 26 年、板橋区の有形文化財に指定された。この銅像の変遷については「櫻園通信 3.4 号」に記載している。養育院 80 年史（昭和 28 年刊）では、戦時の金属供出のため下におろされ、代替コンクリート像が作られたことまでが記載されている。おろされた銅像は施設の片隅の倉庫の横に置かれ、兵器製造のため供出を待っていた。昭和 20 年 5 月の空襲で施設が焼夷弾で焼かれ、本来銅像のあった場所（現在の中学校の体育館の校庭より）は炎上しているが、片隅に置かれていた銅像は焼け残った。昭和 32 年（1957）に存命の作者の監修を受けて修復再建されている。

様々な団体が、様々なスタイルの銅像、石造を作った近代以降の人物を、澁沢栄一以外に知らない。日本銀行の前の常盤橋公園に立つ朝倉文夫作の大きな立像。帝国ホテルの敷地にある、大理石の胸像。一橋大学の如水会館（同窓会館）ロビーの胸像、飛鳥山の旧邸にある銀行協会の若々しい立像、史料館の銅像、頭部石像。生まれ育った埼玉県深谷市にいくつもある銅像。生家にあるバリ出立時の侍姿の銅像（これは、平成になって建てられた）、青森県の小牧温泉にある立像・・・



a: 現在の板橋像 b: 戦災後のコンクリート像
c: 記録書 d: 深谷の生家、バリでの侍姿
e: 銀行協会・飛鳥山邸
f: 日銀前（常盤橋公園）
g: 一ツ橋大学、如水会館 h: 深谷駅前
i: 澁沢史料館（飛鳥山）
j: 澁沢史料館：頭部石像



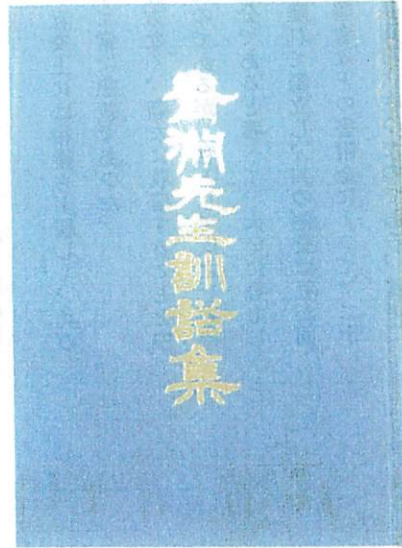


青淵先生訓話集・社会事業思想の変遷と養育院

渋沢栄一（青淵）は、60歳過ぎると、経済活動から次第に身を引き、より積極的に国際関係、社会事業、思想活動に取り組むようになっていく。論語と算盤の思想としての深化、佛一教会、青少年教育、社会福祉事業について、盛んに講演活動を行うようになるが、そうした活動を昭和3年発行の訓話集に見ることができる。その目次の一部を掲げた。その中で、養育院事業に関する一講演があり、その執心ぶり、白川幸翁に対する思い入れが際立っている。白川にある幸翁公顕彰の南湖神社の建設にも積極的に応援するようになる。この稿を本号に転載する。

主な目次

- ・古聖賢の訓言より、経済道徳主義の徹底
- ・復興国民の努力すべき第一義（関東大震災）
- ・わが国民に帯せる、富豪と成敗
- ・世界の平和と人類の文化、国際連盟協会の使命
- ・十国対日問題の経緯、半島の排日移民法
- ・日韓関係蘇生の意義、日中の経済的提携
- ・国際共助精神の現れ、国際道徳と世界平和
- ・政治道徳の本義、政党の墮落と国策の忘却
- ・経済的困難と道徳、学問の実際と能率
- ・企業家と虚業家、経済の合理化と忠恕
- ・著しい社会の変転と理想、産業立国と文化的興業
- ・社会生活と個人生活、労働問題と多数
- ・労働問題の根本的解決策
- ・社会事業の変遷と養育院
- ・人間の本性とその使命、思想の悪化と教育の改善
- ・今後の教育は精神的に、商業教育の進歩
- ・現代青年の通弊、育為の青年は磐石の如し
- ・青年に与える、権利義務の正当なる理解
- ・社会人としての人格修養
- ・克己は仁の原動力、趣味と英益
- ・地位は自ら築くべし、精神の安住地
- ・徳の目的と経歴



七、社会事業思想の変遷と養育院

私は院長となつてゐる東京市養育院に毎月十三日出勤することにして居るが、同院最近の月報を見て、過去五十年の歲月を我身に觸れて思ひ出し、如何にして斯くも變化したかの感想を惹起し、遂には昔と今と何れが果してよからうかとの疑問をさへ持ち、且つ世に必要な事業であると解つて居ても、時の變化はかまうで社会事業に對する感觸を變へるものかと、真に無量の感慨が湧くのを覺える。一體失意の人を憐み、社会の落伍者に同情し、此等の救護に努めることは、國

民の爲すべしとされて居るが、此の考へも年と共に變化するので、一概には論ぜられない。例を東京市養育院の過去五十年の變遷に見ても歴々たるものがある。養育院の最初は乞食を集めたものである。西洋の乞食に就てのことは調べないからよく知らないが、日本に於ては物質は古くから居た。私が知つてからでも、乞食は毎日に米を貰つて歩くのが一般の風習であつて、其數も中々澤山居り、大店などへは常時二十人も三十人もつめかけて居る有様で、見た處頗る體裁が悪く、鬱陶しいものであつた。其處で明治五年であつたと思ふが、外國から身分のある人が來遊されるに就て、乞食狩をして之を一ヶ所に集めることになり、此等を收容したのが養育院の起りである。その時三百數十人を集めたが、早速生活の方法を考へねばならなくなつた。そして斯く集める前には官許の非人頭として車善七と云ふ者があり、何かと乞食の世話をし、生活出来るやうにして居たが、斯く一ヶ所に集めて見ると、其の生活の料を與へる爲めに相當の費用が必要であるのに、此費用の出所に先づ困難したのである。何分當時は新政府の成立後日尙ほ淺く、財政の如き頗る逼迫して居た時のことであるから、乞食の收容に要する資金の出所がない。そこで種々苦心協議した結果、松平樂翁公の手で蓄積した共有金が、政府のものでもなければ個人のものでもないもので、差當りその内から支出することにした。そして場所は初めには上野の護國院を元て、東京警備會議所（後の東京會議所）と云ふものが世話をしたのである。私が其仕事に携はるようになつたのは、當時の東京府知事大久保一翁氏に依頼せられたからである。此人は靜岡藩時代に私の先輩だつた關係から、私が銀行業者になつたに就て、其保管に係る共有金を基本として成立した東京警備會議所の會長と委嘱されたのであつた。東京警備會議所は後に東京會議所となり、多くは社会事業的事柄を行ひ、乞食の世話の外、道路、橋梁のこと、墓地のこと、或は東京商科大学の濫觴たる商法講習所等の世話を主として行つて居た。

然しながら乞食の世話から始められた養育院は、單に共有金のみでは充分に其機能を發揮することが出来なくなり、明治十二年府會が開かれると同時に、府の方から經費の支出することに決したのである。當時の府知事は楠本正隆氏で、私は議員にはならなかつたが、福澤諭吉氏、福地源一郎氏などは議員になつて居た。斯くて二十三年になると、護國院は狭くなつて來たので、泉橋の藤堂屋敷に引移り、其後本所の長岡町へ、それから又大塚へ、更に近頃板橋へ轉じた。本院だけに就ても斯くの如く屢々移轉した程であるから、其間に自ら性質も變化し

て來た。明治十五年であつたと思ふが、養育院の維持に關して強い反對論が起つた。それは當時府會議員であつた沼間守一氏などが『元來人たるものは他人から援助を受くべきでない。誰かどうかして呉れるであらうと云ふやうな考であつては、日本人は自彊息まずでなく、やんでしもふ結果になるであらう。故に救済されると云ふやうな考へを持つことのないやうにせねばならぬ、救済するから其様なつまらぬ考を出すのであるから、救助などしてはならぬので、他人には冷酷でなければならぬ』と主張し、此考へ方が一般を風靡した。然し私はさうは思はず、救助しなければならぬ、又他人に冷酷であつてはいけないとして、大いに論じたけれども力及ばず、遂に府の經費支出は中止せられることになつた。但し私は沼間氏等とは反對の意見を持つて居たと云へ、私交上には相變らず親しく、其の兄の須藤時一郎氏の如き第一銀行の重役であつて常に懇親であつた。

斯くて府會から見離された養育院としては詮方なく、新たに收容することを中止し、自然に減少閉鎖する方針を執るに至つたのであるが、私としては之を維持するのは頭の上よりかゝつた責任であり、職分であると考へて、大いに努力したのである。即ち十八年に到り府の手から全然離れて獨立し、其の經費は私が同志の者又は家内などに相談して組織した婦人慈善會などの寄附金によつて、十二年まで五ヶ年間維持した。當時本院は本所の長岡町に在つたのである。處が二十二年に地方制度が布かれ、東京市に自治制が採用せられたが、其の間時世の變化が相當に激しいものがあり、養育院に對する一般の考へも變り、沼間氏等の唱へた冷酷論は世の容れない所となり、反對に社會に於ける必要なものとして維持しなければならぬが、將來をどうするかと云ふことが問題になつたのである。處が市の方で必要があり適當な施設であると思ふならば引受けてもよいと云ふ内務省令があつたから、茲に養育院を東京市で引受けることに決定した。此時の東京市制は特別市制で、其の市長は府知事が兼任して居た。然し此等の制度は此處に詳しく論ずる要がないから省略するが、要するに養育院は個人經營から地方制度の實施と共に東京市に移され、爾來市設の事業として維持せられつゝある。

然るに其後に於ける社會事業の必要は愈々加はり、官廳や自治體に於ても其事務を取扱ふ爲め、社會局を置くやうになり、東京市にも設置せられたが、養育院は古い歴史もあり、慣例もあり、且つ各方面の有力者から多額の寄附金があつて、

總ての設備なども行はれて居るので、市に於ける他の社會事業と同一視して、其監督下に置くのもどうかと云ふことで、特別なものとして、有名無實ではあるが、私が院長となつて經營して居るのである。そして本院は板橋にあり、建物設備等も相當のもので、不具者や不具に近い所謂貧民の居る所ではあるが、それ程汚くもなく、粗末でもない。特に衛生なども充分に氣をつけて居り、目下千名からの收容者がある。又病院には不治の病者が二百人位居り、更に棄子、迷子等の爲め巢鴨に分院がある。巢鴨分院に收容したもののうち嬰兒は里に出して居るが、在院兒童の數は三四百人程度である。又病弱な兒童は房州の船形の分院で療養せしめて居るが、此れは空氣療法をさせるのがよいと云ふ醫師の説に據つたものである。尙ほ明治三十三年頃東京市内に不良少年が三千人からあり、それ等の者を指導感化する必要があると云ふので、井の頭公園の傍に、不良少年感化所を經營し、全體から見ると僅に一小部分ではあつたが百五十人ばかりを收容し、現に繼續して居る。此の地所は初め宮内省から拜借して居たが、宮内省から東京市に讓渡されたもの、一部である。

斯様に私は東京市養育院と頗る古い關係にあるが、同院が年と共に發展して參つたのは、一般の人々が此種の社會事業を缺くべからざるものとして、寄附金其他後援に盡されたからである。其の結果現今では基本金の内から日常の費用の支出さへ出来る有様である。故に名は東京市養育院であつても、市の金で設置されたとか、府の税金の内から設備せられたと云ふのではない。

斯様に開院した當時の有様と今日の社會の状態とを比較して考へ、所謂社會事業なるものに對する人々の觀念の相違を顧ると、感慨無量である。前にも述べた通り、沼間氏等の主張によつて、一時私の説が敗れた形であつたが、後に至つて、私の主張通りになり、大に喜んだのである。然し果して長きに亘つて満足であるかと云ふと、決して満足であると申すのではなく、或は冷酷であつたならば、今頃は養育院の必要が無くなつて居たのではあるまいか、とさへ思ふことがあり、今猶何れがよいかと斷定出来ぬ程である。

従つて此點は將來社會事業に携る人々に依つて深く考慮して戴きたいと、此處に老人の同願談を敢てした次第である。

なぜ加賀藩屋敷に開設? “養育院”という名の由来は?

じつはまだ解けていない 養育院開設2つの謎

明治五年、ロシア皇子アレクセイ来日に際し、東京市中の貧民を一ヶ所に集めて収容することから養育院の歴史が始まりました。そのとき貧民の収容先になったのが、本郷の加賀藩邸内の長屋でした。当時加賀藩邸には、最後の加賀藩主前田慶寧(よしやす)が居住していました。



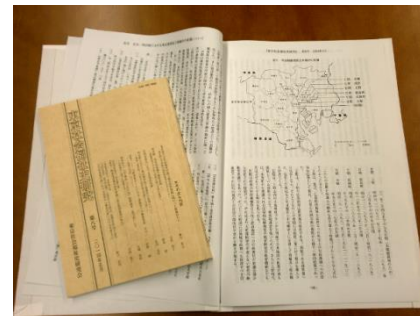
前田慶寧

なぜこの元藩主の住んでいる藩邸内が貧民収容にあてられたのかその理由を記述した歴史史料は見つかっていません。また、現在の春日通りに面した消防署のあたりに長屋があったとされてきましたが、異論もあります。

長沼友兄氏(養育院・渋沢記念コーナー維持ボランティア参加)が今年発表した論文「明治期における東京養育院立地場所の変遷について」によると、廃藩置県後の明治五年春の時点では、屋敷は政府に上げ地となり、司法省と東京府の協議により、加賀藩邸内に小伝馬町の牢屋敷を移して囚獄を建設することが決まっていました。また、当時の東京府囚獄掛は、病気の囚人や十五歳未満の囚人を収容する浅草溜も管理していました。

明治五年十月、貧民たちはアレクセイ来日前に囚獄予定地であった加賀藩邸内に一旦集められ、五日後には浅草溜に移されます。養育院創設の地が加賀藩邸になった経緯には、貧民と犯罪者を同一視する為政者の貧民観が作用していた可能性があります。

前田慶寧は、13代藩主前田斉泰(なりやす)と正室溶姫(11代将軍徳川家斉の21女)の間に生まれました。江戸時代、大名家に嫁いだ将軍家の子が住む御殿には、朱塗りの門が作られました。前田斉泰と溶姫の婚姻の際にも加賀藩屋敷に朱塗りの門が建てられました。それが現在の東京大学の赤門です。前田慶寧は江戸本郷の加賀藩屋敷で生まれ、約40年の生涯の7割の期間は本郷の屋敷で暮らしました。本国金沢に住んでいたのは約12年間だけです。明治4年の廃藩置県後は東京(本郷の前田邸)に戻りますが、本郷屋敷の約1/10の占有を許可されています。近衛文麿(34・38・39代総理大臣)は慶寧の孫、近衛文麿の娘と細川護貞の子が細川護熙(79代総理大臣)です。



長沼友兄「明治期における東京養育院立地場所の変遷について」東京社会福祉史研究 第8号 拡大コピーした冊子を養育院・渋沢記念コーナーに置いてありますので、ぜひご覧ください。

旧幕府の重臣だった大久保一翁は明治五年に東京府知事に就任すると、東京官繕会議所(幕府による困窮民救済積立資金の管理運用を委託された、有力実業家たちの民間組織)に対し、幕府瓦解後に東京にあふれた大量の困窮者の保護施策の実施を働きかけました。



大久保一翁

これが同年の養育院設立につながります。

大久保一翁は、幕臣時代から、江戸に西洋式の救貧医療施設をつくるプランをもっていました。運営資金の確保方法、施設の内容などを病

院創立意見として具体的にまとめ安政四年に幕府に提案しましたが、幕末の政治的混乱のさなかであり、病幼院は実現しませんでした。当時江戸幕府の開明派は、種痘所の設立、天領・長崎でのポンペによる医学伝習所、長崎養生所の設立など、海外情勢の情報を積極的に収集し、それに合わせた国づくりをめざしていました。一翁もその一人です。

病幼院創立意見は、大久保一翁が東京府知事になることで官繕会議所附養育院と東京府病院(府下病院・愛宕下病院とも呼ばれた)という双子の施設として実現しました。

加賀藩では、黒船来航後は海防意識が高まり、前藩主前田斉泰(まさだ)なりやすにより洋学者の登用と西洋兵学・西洋医学の研究・教育にとり組んでいました。シーボルトに学んだ藩医黒川良安や、西洋砲術の指導役として採用された洋学者佐野鼎(かなえ)らを登用しています。佐野は、加賀藩の援助で、幕府の遣米使節団・遣欧使節団にも随行し西洋の知識を深めました。

養育院創設の地、東京の加賀藩邸に住んでいた最後の加賀藩主、前田慶寧(まさだ)よしやす)もまた、幕末の金沢で、大久保一翁同様に西洋の知識を得て、西洋式の貧民用病院を創ろうと考え、藩医黒川良安に永作養生所を見学させ、貧民病院「卯辰山養生所」の設置にこぎつけています。



佐野 鼎



福沢諭吉

遣米使節団・遣欧使節団には福沢諭吉も随行しており、そのときの見聞は「西航記」という日記やそれを発展させた「西洋事情」としてまとめられ、帰国後、外国奉行・開明派や洋学者たちの間で読まれ、西洋社会の知識が共有されました。

福沢諭吉のバリ滞在時の日記に、病院・養老院・養幼院・養啞院・養癲院(精神病院)といった医療施設・福祉施設のひとつとして養育院と読める言葉が一箇所だけ出てきます。

その部分ではどんな施設なのか説明がないのですが、日記の他の箇所と合わせてみると、これは盲学校のことらしく養盲院と記したと考えるのが自然です。

実は現代に活字化された「西航記」では養育(盲)院と、両論併記式に書いています。

福沢諭吉は養育院と書いたのかそれとも養盲院か、現代でも確定していません。



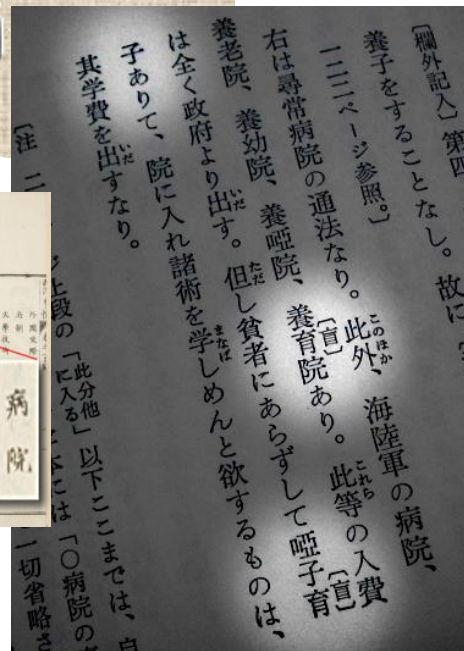
金沢にも“養育院”?

「金沢町絵図」(明治初年) 卯辰山養生所の位置を示す絵図(金沢市立玉川図書館近世史料館蔵)

コンピューター用フォント
白舟極太草書



福沢諭吉「西航記」
養育院の名が出てくる部分。



欧米の制度や技術を、自らの渡米・渡欧体験をもとに解説した福沢諭吉「西洋事情」。

イェズ会士のイタリア人艾儒略(Giulio Aleni, 1582-1649)が編纂した世界地理書「職方外紀」。明(中国)で刊行。日本の蘭学者の間で盛んに伝写されていた。



【参考】
稲松孝思: 赤門の秘密 養育院の黎明期。老研友の会講演 2014.3
長沼友兄: 明治期における東京養育院立地場所の変遷について。東京社会福祉研究 8号 2014 p67-89
荒川清秀: 加藤周一氏の「明治初期の翻訳」について。文明 21 1999 p25-26
島田 肇: 社会福祉の論理と倫理の課題-福沢諭吉の被治者観と儒教。東海学園大学研究紀要 2011 p81
富田正文編: 「西航記」「西洋事情」。福沢諭吉選集 1 1980 岩波書店

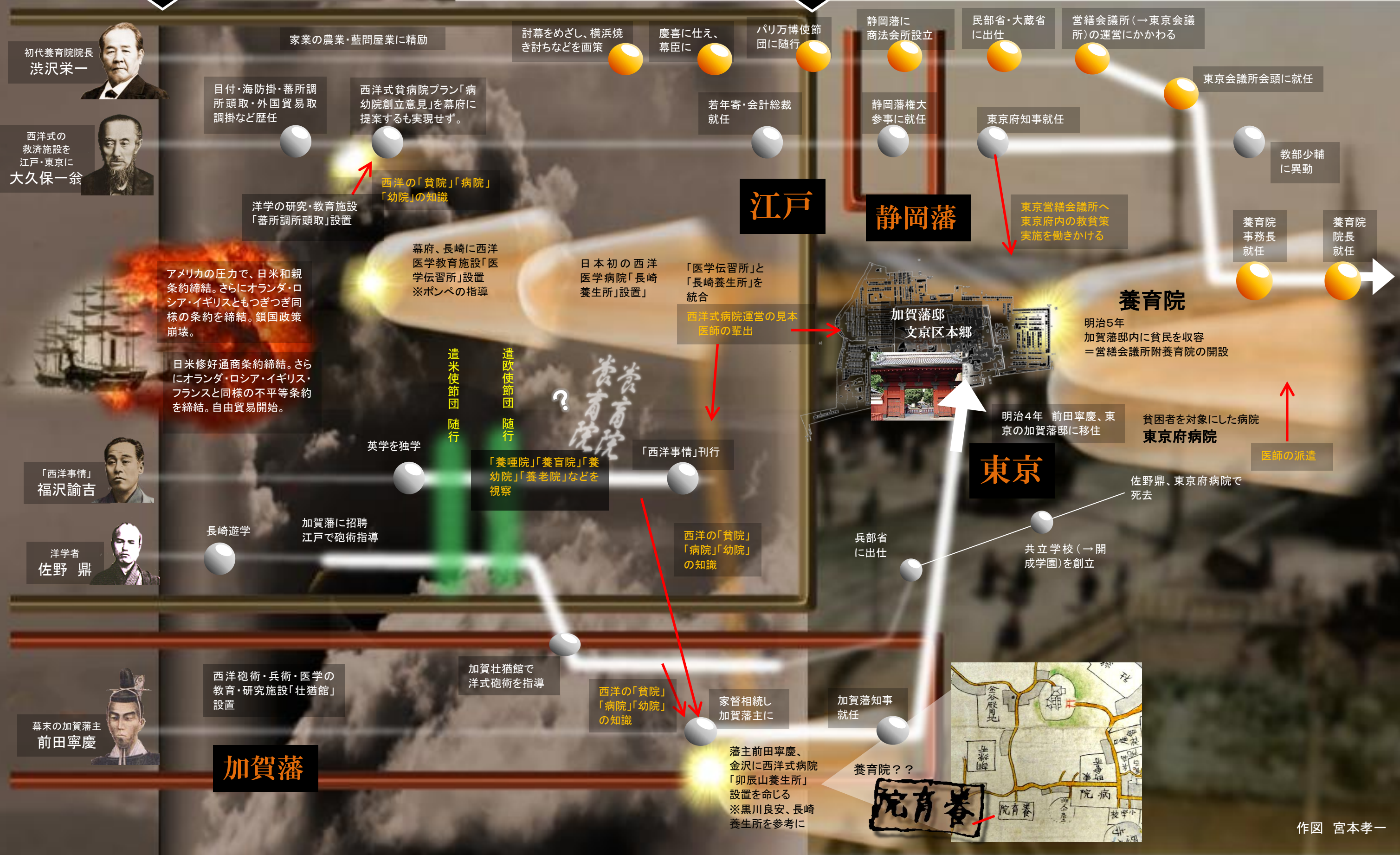
ペリー来航から明治維新までの期間は一般に「幕末」と呼ばれます。アジアに進出してきた欧米列強が強大な軍事力をして日本に開国をせまり、鎖国政策は崩壊。不平等な貿易条約を結ばされることとなります。これ以降、日本国内は国防意識が高まり、幕府や各藩で西洋諸国の社会制度・科学技術の研究(=洋学)が盛んになります。こうした幕末の時代背景の中で、西洋式の貧窮者救済施設・病院が作られはじめ、さらに大久保一翁という人物を通して明治の養育院開設につながっていきます。

幕府崩壊により、各藩の上級武士や有力商人は江戸を離れ、100万ともいわれた人口が半減。東京と改称した首都経済は破綻し、幕藩体制での職を失った大量の深刻な窮民が東京中にあふれていた。

黒船来航

明治維新

明治維新前の10年間 | 明治維新 | 明治維新後の10年間



初代養育院長
澁沢栄一

西洋式の救済施設を江戸・東京に
大久保一翁

「西洋事情」
福沢諭吉

洋学者
佐野 鼎

幕末の加賀藩主
前田寧慶

家業の農業・藍問屋業に精励
目付・海防掛・蕃所調所頭取・外国貿易取調掛など歴任

西洋の「貧院」「病院」「幼院」の知識
西洋の「貧院」「病院」「幼院」の知識

幕府、長崎に西洋医学教育施設「医学伝習所」設置 ※ポンペの指導

日米修好通商条約締結。さらにオランダ・ロシア・イギリス・フランスと同様の不平等条約を締結。自由貿易開始。

長崎遊学
加賀藩に招聘
江戸で砲術指導

西洋砲術・兵術・医学の教育・研究施設「壮猶館」設置

加賀壯猶館で洋式砲術を指導

討幕をめざし、横浜焼き討ちなどを画策

慶喜に仕え、幕臣に就任

若年寄・会計總裁就任

日本初の西洋医学病院「長崎養生所」設置

「西洋事情」刊行

西洋の「貧院」「病院」「幼院」の知識

家督相続し加賀藩主に
藩主前田寧慶、金沢に西洋式病院「卯辰山養生所」設置を命じる ※黒川良安、長崎養生所を参考に

パリ万国博覧会に随行

静岡藩に商法会所設立

「医学伝習所」と「長崎養生所」を統合
西洋式病院運営の見本 医師の輩出

兵部省に出仕

加賀藩知事就任

加賀藩知事就任

養育院??

民部省・大蔵省に出仕

東京府知事就任

東京營繕會議所へ東京府内の救貧策実施を働きかける

明治4年 前田寧慶、東京の加賀藩邸に移住

共立学校(→開成学園)を創立

加賀藩知事就任

養育院??

營繕會議所(→東京會議所)の運営にかかわる

東京會議所会頭に就任

養育院事務長就任

貧困者を対象にした病院 東京府病院

佐野鼎、東京府病院で死去

養育院院長就任

養育院院長就任

東京

養育院

養育院

明治5年
加賀藩邸内に貧民を收容
=營繕會議所附養育院の開設



櫻園通信 16. 平成 26 年 12 月

東京都健康長寿医療センター
養育院・渋沢記念コーナー
連絡先: 老年学情報センター

養育院・渋沢記念コーナーボランティア
中村 弘(養育院を語り継ぐ会 事務局長)

養育院を語り継ぐ会

東京都健康長寿医療センターを利用している方々は、構内の小公園に渋沢栄一の銅像があることは、よくご存じのことと思います。その像の脇に養育院碑があります。同様の碑はこの他に都内の墓地に三か所、栃木県的那須塩原に一か所あります。この通信をかりて、これらの碑を建てるまでの話をしたいと思います。

養育院は明治五年に開設以来、首都東京の社会福祉の大きな部分を担ってきました。平成 11 年 12 月養育院廃止条例をもって廃止されるまで、127 年の歴史がありました。その歴史を見ると日本の福祉・医療の展開に大きく貢献してきています。しかし、人の記憶はだんだん薄れ、記憶を持つ人も少なくなっています。養育院の存在を後世に伝えていくことが大切と考える元職員、退職者が集まって、養育院で亡くなられ、引き取り手のない方々の合葬墓を説明する碑を建てようということになりました。そのための寄付を募ろうということになり何回もの準備会をへて、平成 17 年 7 月「養育院を語り継ぐ会」を結成しました。



本院跡碑の「養育院本院」の文字は
渋沢栄一の墨跡を刻字したものです。
(碑文は櫻園通信 2 号参照)

養育院合葬塚

景気低迷の折、寄付がどのくらい集まるか全く検討もつかないため、まず、養育院で物故した人々の葬られている東京谷中の大雄寺、了侘寺、栃木県塩原の妙雲寺、多磨霊園の養育院墓地に碑を建てることにしました。ところが、思いのほかのご芳志を戴くことができ、大山の養育院本院の渋沢栄一像のそばに、本院碑を建てる事が出来ました。さらに、2 回の講演会、養育院月報復刻版の全 30 巻も寄

養育院関係合葬塚

	埋葬時期	埋葬者数
大雄寺(だいおうじ)日蓮宗	明治 6	100 柱
了侘寺(りょうごんじ)天台宗	明治 6-大正 2	3,762 柱
多磨霊園 合葬塚	昭和 8-平成 19	26,450 柱+1
天王寺裏墓地(谷中)	明治 32-大正 2	
芋坂合葬墓地(谷中)	大正 3-昭和 2	多磨霊園に合葬
了侘寺納骨堂(谷中)	昭和 2-昭和 7	
妙雲寺 臨済宗	昭和 19-27	582 柱
	合計	30,895 柱
<hr/>		
大福寺 よい子の墓(船形) ※塩原の 56 名、卒園生含む		143 柱

付することが出来ました。養育院を職場として、多くの人たちのお世話をしてきた方々、春秋に香華を手向けてきた担当者達の熱い思いの結晶です。さて、この碑で何を伝えるか、碑文の起草が始まりました。議論百出でした。この通信で各地に建てられた碑を紹介させていただきますので、是非読んでいただきたいと思います。養育院を語り継ぐ会の活動は、本院碑の設置によって終わりましたが、引き続き養育院は健康長寿医療センターの養育

院・渋沢記念コーナーで語り継ぐことが出来るようになったことも嬉しいことです。会の活動は碑の設置のほか、養育院に関する一般、板橋看護学校学生向けの講演会、養育院月報復刻版の寄付などを行いました。この間、北区飛鳥山にある渋沢史料館の協力や資金の少ない中、碑の制作会社、石材店の方々にも一方ならぬ協力をいただきました。この活動を通して元養育院の職員の思いがいかにか強いものであったかを実感しました。厚く御礼申し上げます。

養育院義葬之家 東京都台東区谷中 大雄寺(全文)

養育院は、明治五(千八百七十二)年十月十五日に創設された。維新後急増した窮民を收容保護するため、東京府知事大久保一翁(忠寛)の諮問に対する営繕会議所の答申「救貧三策」の一策として設置されたものである。この背景には、ロシア皇子の訪日もあった。事業開始の地は、本郷加賀藩邸跡(現東京大学)の空長屋であった。その後、事業拡大のため養育院本院は東京市内を転々としたが、関東大震災により大塚から現在地の板橋に移転した。養育院設置運営の原資は、営繕会議所の共有金(松平定信により創設された七分積金が新政府に引き継がれたもの)である。

養育院の歴史は、渋沢栄一を抜きには語れない。営繕会議所は、共有金を管理し、養育院事業を含む各種の事業を行ったが、渋沢は明治七年から会議所の事業及び共有金の管理に携わり、養育院事業と関わるようになった。明治十二年には初代養育院長となり、その後亡くなるまで、五十有余年にわたり養育院長として事業の発展に力を尽くした。

養育院は、鰥(かん)寡(か)孤(こ)独(どく)の者の收容保護から始め、日本の社会福祉・医療事業に大きな足跡を残した。平成十一年十二月、東京都議会において養育院廃止条例が可決され、百二十七年にわたる歴史の幕を閉じた。

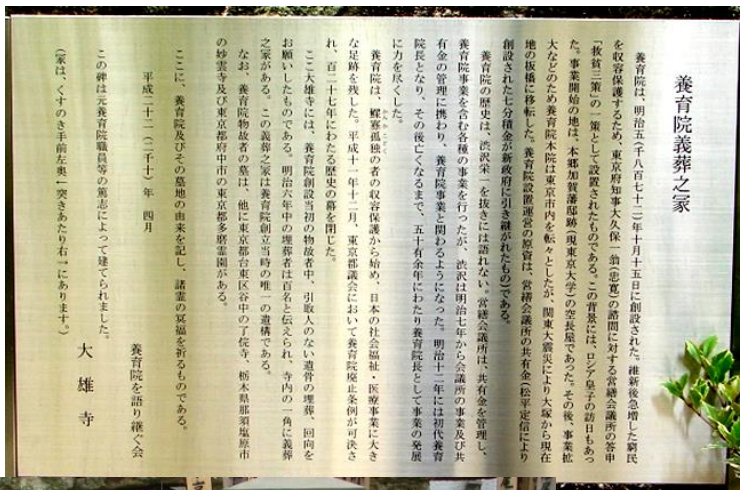
ここに大雄寺には、養育院創設当初の物故者中、引取人のない遺骨の埋葬、回向をお願いしたものである。明治六年中の埋葬者は百名と伝えられ、寺内の一角に義葬之家がある。この義葬之家は養育院創立当時の

唯一の遺構である。

なお、養育院物故者の墓は、他に東京都台東区谷中の了庵寺、栃木県那須塩原市の妙雲寺及び東京都府中市の東京都多磨霊園がある。

ここに、養育院及びその墓地の由来を記し、諸霊の冥福を祈るものである。

平成二十二(二千二十)年四月 養育院を語り継ぐ会
この碑は元養育院職員等の篤志によって建てられました。大雄寺



東京都台東区谷中・大雄寺。
背面の記載： 明治六年癸酉始養窮民於養育院其死者葬此

東京都養育院慰霊碑 東京都台東区谷中 了侘寺(抜粋)(前文略 大雄寺と同じ)

ここに侘寺には、養育院の物故者中、引取人のない遺骨を埋葬、回向をお願いしたものであり、明治六年末から大正二年に至る埋葬者は三千七百六十二名である。

なお、養育院物故者の墓は、他に東京都台東区谷中の大雄寺、栃木県那須塩原市の妙雲寺及び東京都府中市の東京都多磨霊園がある。

ここに、養育院及びその墓地の由来を記し、諸霊の冥福を祈るものである。

平成二十二(二十)年四月 養育院を語り継ぐ会

この碑は元養育院職員等の篤志によって建てられました。了侘寺



東京都台東区谷中・了侘(ごん)寺
碑の設置の最中、激しい雨が降り終わると、きれいに晴れ上がり、物故者が喜んでいるようでした。



東京都養育院合葬碑 栃木県塩原 妙雲寺（抜粋）

（前文略 大雄寺と同じ）

養育院は昭和十九年、戦禍を避けるため院をあげて塩原に疎開を決定、地元の旅館を買収し、同年八月、塩原分院を開設した（龍泉閣、宮田屋を龍泉寮、宮田寮として事業開始。その後常盤寮、塩釜寮、上富士寮を順次買収。塩原分院は昭和二十一年に栃木分院と改称）。

当初は板橋本院より、老人及び盲人などを疎開させたが、戦局の悪化及び板橋本院の空襲による壊滅により、安房臨海学園、石神井学園の児童及び島嶼（とうしょ）引揚者も加わり、「養育院百年史」によれば、昭和二十年五月には養育院収容者千二百十一人のうち、六百九十四人が在籍、塩原は養育院事業の中心となった。

栃木分院廃止の昭和二十七年までのこの地における物故者は五百八十一名。妙雲寺に埋葬、回向をお願いし、昭和二十八年には養育院合葬碑を建立した。後に一名を合葬、現在は五百八十二名が眠る。

戦中、戦後の物資の不足、特に食糧事情の劣悪な状況の中での地元塩原の皆様の「ご厚情」に対し、この碑を建立するに当たり、改めて感謝の意を表するものである。

養育院は、鰥（かん）寡（か）孤（こ）独（どく）の者の收容保護から始め、日本の社会福祉・医療事業に大きな足跡を残した。平成十一年十二月、東京都議会において養育院廃止条例が可決され、百二十七年にわたる歴史の幕を閉じたが、養育院が行ってきた事業はかたちを

かえて現在も引き継がれている。

なお、養育院物故者の墓は、他に東京都台東区谷中の大雄寺、了侘寺及び東京都府中市の東京都多磨霊園がある。

ここに、養育院及びその墓地の由来を記し、諸霊の冥福を祈るものである。

平成二十二（二千十）年四月 養育院を語り継ぐ会
この碑は元養育院職員等の篤志によって建てられました。妙雲寺



栃木県塩原・妙雲寺
先の大戦中の疎開先の栃木分院における無縁仏のお墓です。

養育院合葬冢 東京都多磨霊園（前文略 大雄寺と同じ）

ここ多磨霊園には、昭和八年以降、養育院の物故者中、引取人のない遺骨を埋葬し、現在も供養をしている。

なお、養育院物故者の墓は、他に東京都台東区谷中の大雄寺、了侘寺及び栃木県那須塩原市の妙雲寺がある。

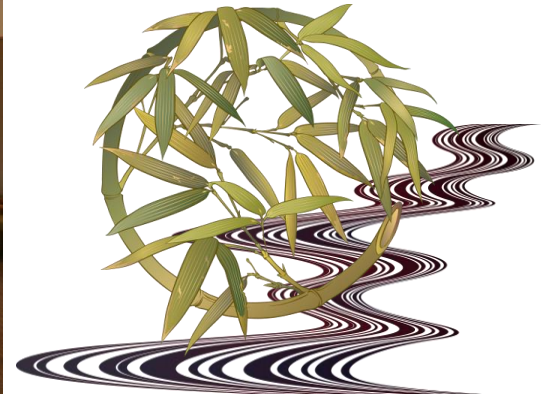
ここに、養育院及びその墓地の由来を記し、諸霊の冥福を祈るものである。

平成二十二（二千十）年四月 養育院を語り継ぐ会
この碑は元養育院職員等の篤志によって建てられました。東京都福祉保健局



都立多磨霊園養育院墓地
ここ多磨霊園には、この碑文にある養育院創設時の東京府知事、大久保一翁の墓所があります。

東京都健康長寿医療センター
養育院・渋沢記念コーナー
連絡先：老年学情報センター



宮本孝一（老年学情報センター）

養育院・渋沢記念コーナーの円形ホールには、健康問題に関する図書を集めたサブコーナー「なるほど! からだラウンジ」を設けています。

こうした、患者様とご家族の方を対象にした図書コーナーは、一般に「患者図書室」と呼ばれ、全国各地の医療機関に設けられています。

「なるほど! からだラウンジ」では、図書だけでなく、模型・インターネット・映像などでも、病気の知識や健康問題への対処についての情報を提供していきたいと考えています。

病院の患者図書室は本の貸出をしていないケースが多いのですが、「なるほど! からだラウンジ」では、患者様とご家族の方には本の貸出もしていますので、ぜひご利用ください。

このスペースは、休憩コーナーにもなっております。もちこみでの飲食もOKです。



「なるほど! からだラウンジ」では、病気や治療法・介護などに関する本を約八〇〇冊置いています。また、書架にある本の他に、常時一〇〇冊程度の本が貸出で利用されています。



読書の楽しみとしての本も置いてあります。こちらには貸出の手続きは不要です。



かつては、人の命にかかわる病気
 と言えば結核などの感染症でした。
 現代は、糖尿病・脳卒中・心臓病
 など「生活習慣病」と言われるもの
 や、平均寿命の伸びとともに発症者
 が増えたガン、認知症といった病気が、
 人の生命と生活に大きな影響を与え
 ています。

それらの現代の病気には、

- ・病状の悪化を遅らせることはでき
ても、完全回復はむずかしい。
- ・後遺症が残る場合がある。
- ・身体に複数の病気をかかえる。
- ・再発のおそれがある。
- ・元の生活・職業に戻ることがむず
かしい場合あり。
- ・長期に続く治療。

といった特徴があります。



大人気「数独」



こうした、現代の病気の特徴に合
 わせて、「なるほど！からだラウンジ」
 では、次のような情報を提供してい
 きたいと考えています。

現時点でのカラダの問題と対処法

- ・病気と治療法についての理解を
深める

病気予備軍に役立つ知識

- ・予防法の正しい知識
- ・病気の兆候に早く気づく、早期
発見の方法

治療中の生活

- ・毎日の自己管理術
 - ・具合の悪いところをもちながら
の日々の生活のあり方を見直
す、もの見方、新たな人生観
- 患者を支える家族**
- ・病気や治療法の理解
 - ・患者を支える生活での人生観



医師とのコミュニケーション

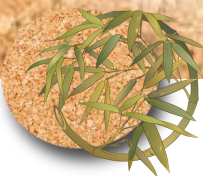
- ・自分の状態を十分に伝えるコツ
- ・医師から重要ポイントを確実に
聞くコツ

病院外の介護生活

- ・役に立つ制度
- ・介護生活のコツや介護の技法

はらんとする健康法・健康食品の 情報

- ・周りの人からすすめられる健康
食品、テレビや新聞広告・雑誌
で紹介される健康法や健康食
品。健康被害や無用の出費を回
避するための、医学的な信頼性
をチェックする方法



健康食品・サプリメントに ついての 解説パンフレット類

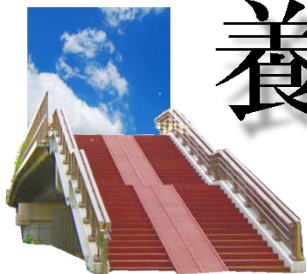


電子版「養育院・渋沢記念
コーナー、なるほど！から
だらウンジ」

インターネットでの調べも
のできます。

養育院の 歩道橋

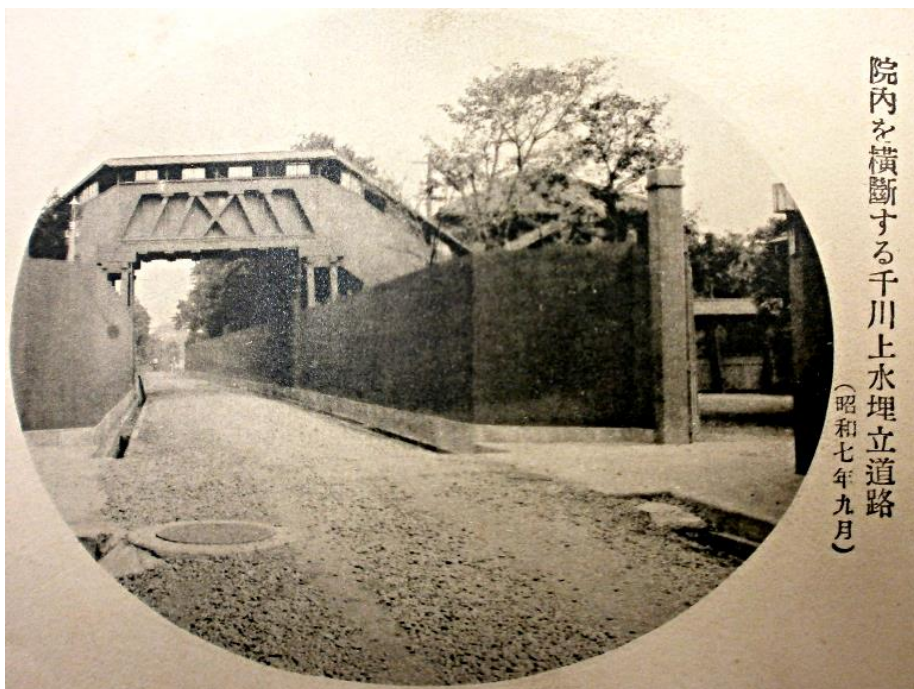
宮本孝一（老年学情報センター）



車道や線路をまたぐ、歩行者専用の橋「歩道橋」。
歩道橋は、昭和三〇年代に車社会が到来し、交通事故の多発（交通戦争）が社会問題になったことで、日本各地に作られるようになりました。
日本初の歩道橋は、一九五九（昭和三四）年に学童専用陸橋として愛知県に作られた西枇杷島町横断歩道橋（にしびわじまちょうおうだんぼごうきょう）とされています。



「日本初の歩道橋」西枇杷島町横断歩道橋（愛知県清須市）。二〇一〇（平成二二）年に取り壊された。



院内を横断する千川上水理立道路

（昭和七年九月）

ここに、一枚の歩道橋の写真があります。よく見ると道路に轍（わだち）が見えます。車道をまたぐ歩道橋です。
撮影は昭和七年九月と記されています。西枇杷島町横断歩道橋に先立つこと約三〇年。もしかするとこれが本当の「日本初の歩道橋」かもしれません。
「院」とは養育院のことです。

この歩道橋の写真は「創立六十周年記念寫眞帖 東京市養育院昭和七年十月」(老年学情報センター所蔵)に掲載されています。

かつて養育院の敷地には千川上水が横切って流れていました。千川上水は、玉川上水から分岐し、西東京市・武蔵野市の境界から西巣鴨まで続く全長二二キロの用水路です。現在、ほとんどの区間は暗渠になっています。

養育院敷地を横切る千川上水も道路になりました。そして、道をまたぐ歩道橋が作られたのでした。

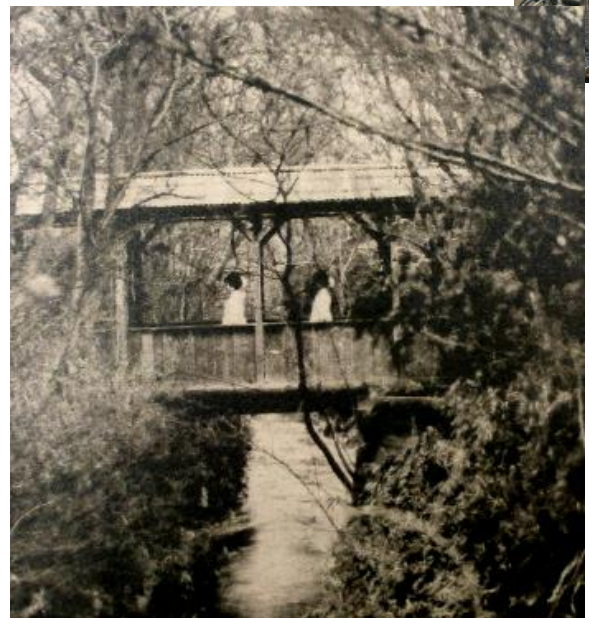


歩道橋はこのあたり？



日本では、一九三三(大正)年の関東大震災をきっかけに自動車が増えました。東京では市電・鉄道が壊滅し、復興資材運搬用でトラックなどの車が大量に輸入されました。市バスやタクシードも増加しました。これが日本のモータリゼーションのはじまりといわれています。

また、関東大震災では、当時大塚にあった養育院本院が崩壊。養育院本院は、もともと分院のあった板橋に急ぎよ移転しました。日本初の歩道橋(？)「養育院の歩道橋」誕生は、関東大震災が遠因といえるかもしれません。



歩道橋が作られる前は、千川上水に屋根付きの橋が架かっていました。(昭和五年撮影 創立六十周年記念寫眞帖より)



房総・船形の『よいこのお墓』と 養育院記念磨崖碑

房総半島の先端、館山の隣に那古の崖観音で有名な大福寺があるが、そこから見下ろす館山湾は絶景である。その一角の墓地に養育院の引き取り手のない物故児童を葬る“よい子のお墓”がある。

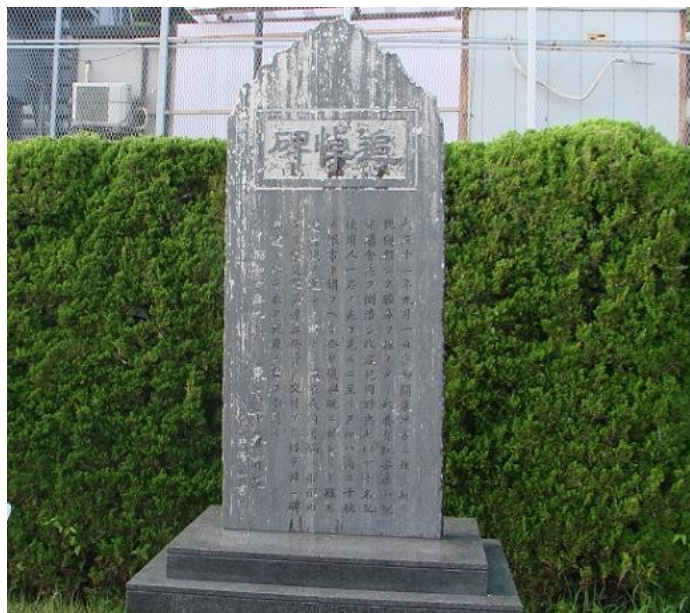
その近くに、明治 42 年に建てられた東京市養育院の安房分院があった。今日東京都社会福祉事業団の“東京都船形学園”として運用されている。

ここには養育院の施設の由来を印した巨大な磨崖碑があり、敷地内に関東大震災の物故者の慰霊碑がある。

東京市養育院は、松平定信の七分積金が東京府に引き継がれたのを活用して、明治 5 年に窮民救済施設として創設された。その運営に渋沢は明治 7 年から関与し、明治 18 年には棄児、迷児の救済を始めている。明治 42 年、医長・入澤達吉は、本院の虚弱児の養育に風光明媚な房総の地を選び、虚弱児童の転地療養施設として安房分院を開設した。そして、此の地でなくなった子供達のために、『よい子のお墓』が建てられている。

また、大正 12 年の関東大震災の大津波で、子供達、職員などが亡くなり慰霊碑が建てられている。現在は姿を変えて、擁護と自立支援が必要な児童の施設となっている。

この施設の裏手に、10メートルに及ぶ巨大な崖を削って作られた、施設の由来を印す磨崖碑があり、日本福祉史の記念碑となっている。



船形町有志によって、大正 6 年 4 月着工、同年 5 月末日竣工した。撰文は二松学舎創立者で、明治の 3 大文人にあげられた三嶋中洲博士、書は青淵の号を持つ、初代養育院長渋沢栄一による。崖の高さは 16m、碑の高さ 10m、幅 6m、一文字の大きさが 30cm 四方という国内有数の碑だったが、岩質のもろい砂岩の房州石に彫られたため風化が著しくわずか数文字がかるうじて判読できるほどになってしまった。そのため、80 周年記念に (1989 年)、碑文を刻むミニチュア碑が建てられた。

また 100 周年 (2009 年) に、判読可能なように、大改修が行われた。

磨崖碑 碑文のあらまし



明治維新の後、東京府は、自ら窮状を訴えることのできない老人を上野の護国院の土地に收容し養護した。名付けて養育院という。養育院は、後にまた棄児を四〇年間養育した。その数三万七千余人となる。現在(大正三年)は二千四百余人で、そして児童が最も多い。思うに養育院の元手は、白河藩主で、老中の松平定信が寛政の改革時、江戸町民七分積金制度の蓄積が東京府に引き継がれていたものを充てて創始したものである。

これに慈善家の寄付でふやし、養育院長洪沢男爵が公共のために身を顧みずつくしてきたものである。規模は年毎に拡げられた。明治三十三年に身体の極めて弱いものを千葉県船形町に移し養育した。その数百余人である。

建物を新築し、勉強ができるところを設けた。名付けて養育院支院という。約十年で子どもたちの多くは若死を免れることができ、これを聞く者は本当に感心した。東京慈善会(院長夫人が会長)は、この事業を大いに賛成援助した。土地の名望家で土地や金銭を寄贈する人が大変多かった。

近頃、男爵が来臨視察され大変喜ばれ、これからも一層この事業を拡張しようとされ、私を呼んでこれを崖に刻みつけられた。男爵は、そこで文章をつくっていわれた。本当に悲しいことに身寄りがなくて、さらに加えて身体が弱い児たちを同じ仲間としての心をもつ人が、これを養育院と相談し、この房総の海辺に建物を作った。

ここは冬暖かく夏涼しい。病気の人は治癒し、身体の弱い者は強くなる。ここに生活のための仕事を授け、ここで、物事の大綱を教える。常にかわいそうに思うべきである。

これら多くの児が自立して恩を思い、救済事業の志をもつ人が出ないと誰がいえようか。

櫻園通信 20

櫻園通信 20. 平成 27 年 1 月

東京都健康長寿医療センター
 養育院・渋沢記念コーナー
 連絡先: 老年学情報センター

■ 宮本孝一 (老年学情報センター)



板橋区の登録文化財 渋沢栄一銅像に 区が解説板を設置

平成二十六年十二月二十五日、板橋区教育委員会が、渋沢栄一像の解説板を設置しました。

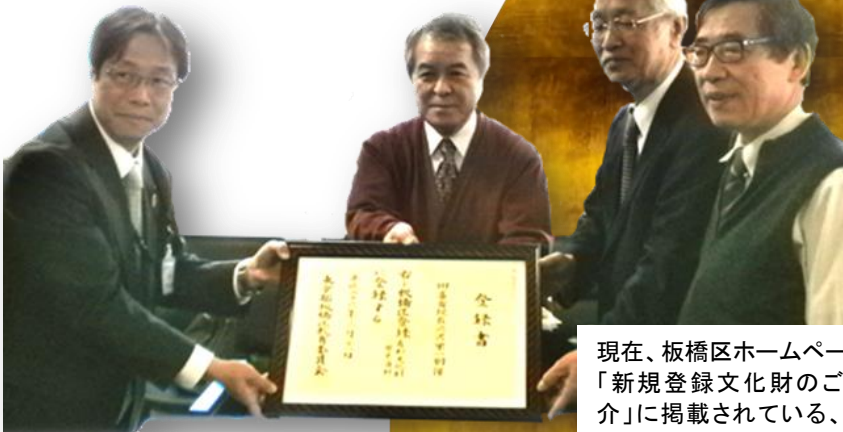
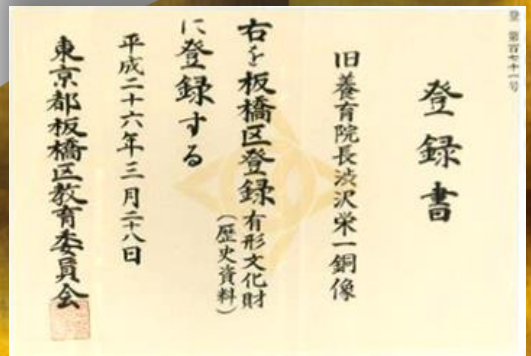
大正十四年に板橋の養育院本院（現在の板橋第一中学校の校庭）に建てられ、焼夷弾による戦火を乗り越え、施設の敷地内を何度か移動しています。

この、渋沢栄一銅像は、板橋区近代化の歴史を語る重要な史跡として、平成二十六年三月に板橋区の登録文化財に登録されました。



渋沢栄一銅像は 昨年 3 月に 区の文化財に

平成 26 年 4 月 14 日、健康長寿医療センター理事長室で、板橋区教育委員会より松下理事長に文化財登録書が手渡されました。



現在、板橋区ホームページ「新規登録文化財のご紹介」に掲載されている、渋沢栄一銅像の解説。





超現代語訳「病幼院創立意見」

病幼院創立意見と雑誌「江戸」

明治も末になると、旧幕臣を中心に江戸期の事跡を残すためにいくつかの雑誌が出版された。

「江戸」はそのひとつで、江戸旧事采訪会による。明治末に徳川の遺臣が記録の散逸を恐れて出版したものである。平山省齋の子孫が、出版元の『江戸旧事采訪会』の主要メンバーで、平山家資料によるとと思われる記事も多い。この雑誌が出る頃、平山家に伝わる文書を典拠に作られたものと推察される。

その中に**病幼院創立意見**がある。提出したのは目付**大久保右近将監忠寛**。

この人は、幕末にペリーの黒船が来航したとき、老中の阿部正弘が再編成した海防掛に抜擢された 500 石の中堅旗本である。当時講武所設立に関与しており、新設された**蕃書調所**の総裁に兼務で任命されている。当時古賀謹之助が頭取として蕃書調所の準備を整えていたが、大久保総裁が突然上から降ってきて、相当不満であったようだ。此のときの総裁職の期間は短く、**病幼院創立意見**提出直後に長崎奉行に任命されている。しかし赴任を辞退したために、抗命のために駿府奉行に左遷されている。

長崎奉行の後任に岡部長常が赴任しているが、この時期にオランダの海軍伝習所にオランダ軍医ポンペが来日し、医学伝習所、その実習の場として長崎養生所が作られたが、これが日本における西洋式の近代病院の初とされ、今日の長崎大学医学部の源流とされている。病院建設のとき、ポンペは長崎奉行・岡部永常の理解と協力を激賞している。当時の長崎の海軍伝習所では、永井尚志、岡部永常、木村喜毅ら、江戸幕府開明派が実務に当たっているが、大久保忠寛(後に隠居名・一翁を名乗る)の同輩・後輩の近い関係にあり、そこには幕府開明派の西洋医学に対する共通理解がある。勝海舟は、大久保が発掘し育てた 7 歳下の微禄の旗本で、伝習生である。

病幼院創立意見原文のコピーの一部は、額装して展示ケースに飾ってあるが、理解しやすいように超現代語訳し、横書きにした。上記写真は、幕末に開成所で撮影された大久保忠寛(隠居名・一翁)。(稲松孝思)

超現代語訳 病幼院創立意見

「蕃書調所」が作られ、蘭学もだんだん盛んになってきました。近頃、西洋各国では一般に慈悲仁恵を重んずるようになり、各国の首府では、病院や幼院をつくり、鰥寡孤独(かんかこどく:独居のやもめ、孤児)を可哀想に思ってお世話するようになっていきます。江戸には以前から**小石川養生所**があり、困っている人のお世話をしてきましたが、費用もかかり、いろいろ面倒もありますので、永続的なやり方、資金繰りを考えた上で、私案を提出しますのでご検討願います。

病院

1. 医師
 - 医長 200 俵 1 人
 - 副医長 150 俵 2 人
 - 管理職は世襲せず。(小石川療養所後期の沈滞は、肝煎・小川家の世襲が一因)
 - 医師 10 人
 - 藩醫、町醫などにかかわらず、西洋医学を勉強し、治療の腕の良い人を選んで。(幕府と諸藩、武士と町民の垣根を取り払っている。蕃書調所・大久保の共通原則)
 - 給与は一人 10 人扶持 半日ずつ当番制で勤務、治療を専門にする。計 180 石
 - 薬料は 1 貼銀 5 分で、毎月支給、詳細は別添
 - これまで醫藥館と小石川養生所などで厚くお世話し、薬種なども支給してきたが、その弊害もあり、(一括支給、ピンはねが小石川養生所で横行)実際に治療した分だけ、支払うようにする。
2. 介保人 170 人(利用者 3 人に一人)
 - 西洋医家で修行中の人で、病人を実際に臨床で数日お世話している間に、種々の工夫し治療方法もうまくなる。医術修行中のひとは、病家に泊り込み、数日介保方法を修行する。前述の医師は、門人・塾生などの中で、師匠の見込みを以て介保者にする。なお、病人 1 人に付 1 日銀 3 匁ずつとし、介保料を支払う。
 - 病人 500 人と見積もって、1 か年銀 1,400 貫目
3. 利用者(患者)

- ・薬料・・・病人 1 人に付き 5 貼/日
- 一日銀 1 貫 250 匁 1 月 37 貫 500 匁
- 1 年銀 450 貫
- ・扶持米・・・1 月 75 石 1 年 900 石
- ・塩、味噌、雑費・・・1 日 銀 2 貫 500 匁 1 月 75 貫目
- 1 年 900 貫目
- 4. 医師 3 人の賚料:勤務時
 - ・米 1 ヶ月 4 斗 5 升 1 年 5 石 4 斗
 - ・塩、味噌、雑費:1 日銀 6 匁 1 月 180 匁 1 年 2 貫 60 目
- 5. 介保人
 - ・米 1 ヶ月 25 石 5 斗 1 年 306 石
 - ・塩、味噌、雑費:一人に付き銀 2 匁
 - 1 日 500 目 1 月 16 石 200 目 1 年 194 貫 400 目
- 6. 幼院を兼ねて取締役人 1 人(事務長)
 - 1 年の役料 20 人扶持 この石数 36 石 お役金 15 兩
 - 信実綿密な人物。お目見え以上持高は廉い方が 良い
- 7. 幼院を兼ね雑用掛 8 人
 - 1 年 10 人扶持 石数 144 石
 - お役金・・・20 兩 1 年 160 兩
- 8. 病人夜具
 - 500 人前 一揃い 3 兩 全 1,500 兩
 - 繕い、予備含めてこれ位
- 9. 雑具類そのほか雑用
 - 医師、介保人病人あわせて 673 人
 - 一人に付き 2 分 1 年 336 兩 2 分
 - 米 1,391 石 4 斗 金 2,011 兩 2 分 銀 2,946 貫 560 匁 計:52512 兩 1 分 1 朱 5 分 1 厘(但し 1 国 1 兩の積もり)

幼院

- 小児 300 人収容の予定
- 1. 白牛 100 匹
 - 金 300 兩 但し 1 兩/匹
- 2. 牛飼い 50 人
 - 1 月 15 石 1 年 180 石 1 年 250 兩 二人口 5 兩

3. 扱女 300人
 扶持 1月 45石 1年 540石
 賄い料 1月 600目 1年 7貫 200目
 給金 1年 1,500両 (5両/日)
4. 小児、阿母 夜具 300人前 一揃い 3両 1年 3,000両
5. おむつ料 一人につき 1両 1年 300両
6. 衣服料(1歳以上) 一人に付き夏冬共 2両 1年 600両
7. 於御場所? 小児 300人扶持 1月 45石 1年 540石
8. 同雑用 一人 2匁 1月 600目 1年 7貫 200目
9. 雑具代 2分/人 1年 300両
 計 1,260石 5,950両 銀 14貫 400目
 総計 金 7,450両

病幼院全体で 金 59,962両 1分 1朱 5分 1厘

凡その支出を調べた所上記の通りであった。此の支出は官庫に頼らず、人々にも迷惑にならないよう、方法をいろいろ熟考し、江戸の家持町人に其の趣旨を説明し、1年に1両ずつ上納し、病幼院の必要経費を賄えば支障はない。(七部積金のような資金計画)

寄付を納金して貰うのも有り難く、人々の差し出す費用はとってもし意義のあるものです。御仁徳限りなく施す趣旨が生きてお思います。江戸府内の家持町人の調査をしたところ、町奉行所支配の分だけで13,822人程います。これらの人に年1両ずつ出してもらうと、一月銀5匁、1日に割ると銀1分6厘7毛ずつとなり、抛出する側にも意義深い。それでも、余分に上納することになり、少額でも負担に思うでしょうから、年々の祭礼にかかるお金の内、家持町人一人に付差し出す1両を減らし、病幼院の用途に回すよう仰せつけば、より一層差障りは少ないでしょう。地位の高い人やお金持ちの寄付もあるでしょう。家持町人の一人平均1両、総計13,822両を集める予定ですが、地位の高い人、お金持ちはもっと出してくれるように奉行から仰せつけばよいと思います。

この上納金を両方の施設の費用に使い、余った分は、身元の確かな町人に両施設の必要なものを納めさせる費用として、金50両に付銀15匁の利息で貸出します。利息収入がだんだん増えてくれば年々元金に加え、だんだんそれが増えてくれば、病人や子供で施設を使いたい人が多数に増えても、差障りなくなるのではないのでしょうか。

上記の出費と貸付金の運用方法はこのようです。

1. 江戸の家持町人13,822人
2. 年に1両納めると一年で総額は13,822両
3. このうち病院費用は7,520両、幼院費用は2,152両3分と100文 計 金 9,772両と100文
4. 残金 4,493両3分 永 150文

病院幼院創立意見の背景とその後の展開

蕃所調所の最初の具体的な仕事として提出されたのが、この大規模な西洋版小石川養生所の創設意見である。その直後に大久保忠寛は長崎奉行の辞令が出たのだが赴任せず、懲罰的駿府町奉行の辞令が出て赴任することになる。長崎奉行の後任には水野忠徳勘定奉行の兼任のあと、岡部永常が赴任し、翌年ポンベの提案を実現する長崎養生所の建設が幕府の手で行われた。江戸では西洋医学の導入に反対する漢方の多紀一派の抵抗を抑えてお玉が池の種痘所が作られ、翌年には官営の西洋医学所となった。咸臨丸はサンフランシスコ出発時、乗員に熱病が流行し、アメリカ海員病院へ入院させたが、これを仕切ったのが船医の牧山脩卿である。彼は帰国後、西洋医学所の頭取となっている。文久遣欧使節団の任務のひとつに『夷情探索』があり、当時の蕃書調所頭取を大久保一翁が勤めている。大久保は箕作や、福沢諭吉などの蕃書調所スタッフをこの任務のために派遣している。

これらの情報は幕末の騒乱の中で生かすことは出来なかったが、明治になってからの駿府藩立病院、東京での養育院・東京府病院の建設へと繋がっていくのである。

- このうち金 1,000両は建築費
 残り 3,049両 3分 永 150文
 年々の両施設の運営に使用した残金は、貸し出し、利息は計算の通りです。ただし年5分
 初年度の元金...3,049両 3分 永 150文
 この利金 152両 一分 永 150文
 2年目...元金 3,202両 1分 永 45文 このうち 3,202両 145文
 初年元利合計 4,049両 5分 永 150文
 この利金 362両 2分 永 114文 8分
 3年目...元金 10,642両 3分 永 59文 8分
 このうち 7,614両 3分 159文 8分
 2年元利合計 4,049両 5分 永 150文
 この利金 583両 永 240文 4分
 4年目...元金 16,297両 3分 永 100文 3分
 このうち 12,248両 永 50文 3分
 3年元利合計 4,049両 5分 永 150文
 この利金 814両 永 3分 永 147文 5分
 5年目...元金 21,160両 2分 永 247文 8分
 このうち 17,112両 3分 永 97文 8分
 4年元利合計 4,049両 5分 永 150文
 この利金 1,058両 永 137文 4分
 元利合計 22,220両 3分 永 135文 2分

右の通り準備金が年々増加する件については、差し支えはありません。仁政が行き届くようになるでしょう。場所については高爽地でなければ、療養も幼育も行き届かかねるので、三番町御薬園を、病幼院全体の立地にして頂きたい。ほかの詳細はそれぞれの掛に言いつけ、経験しながら順次述べてゆきたい。見込みの概略を調べ町奉行に提出した案を添え、以上を申し上げます。

安政4年正月 大久保右近将監忠寛(⇒幕閣に提出)

今度病院幼院は番町御薬園へ建築され江戸府内の鰥寡孤独で難渋している下々末端まで、順次援助する趣旨です。就きましては府内の家持町人は1年に1両ずつ、このような用途の為に納めてください。尤も地位の高い方、金持ちも居ますので、神事、祭礼など、無益の町入用を減らし、地面1箇所につき平均1両渡してください。このお金の納め方の詳細は、掛が居ますのでご相談ください。(江戸)

◆解説...昭和51年、東京市史稿編纂者の意見

案ハ平山敬忠(省齋)筆ニ成ルト云フ。幕府多事ノ際之ガ実施ヲ見ルニ至ラザリキト雖、現時ノ養育院制度ノ夙ニ有識者間ニ唱道セラレタルヲ推知ス可シ。

幕府開明派の西洋医学導入

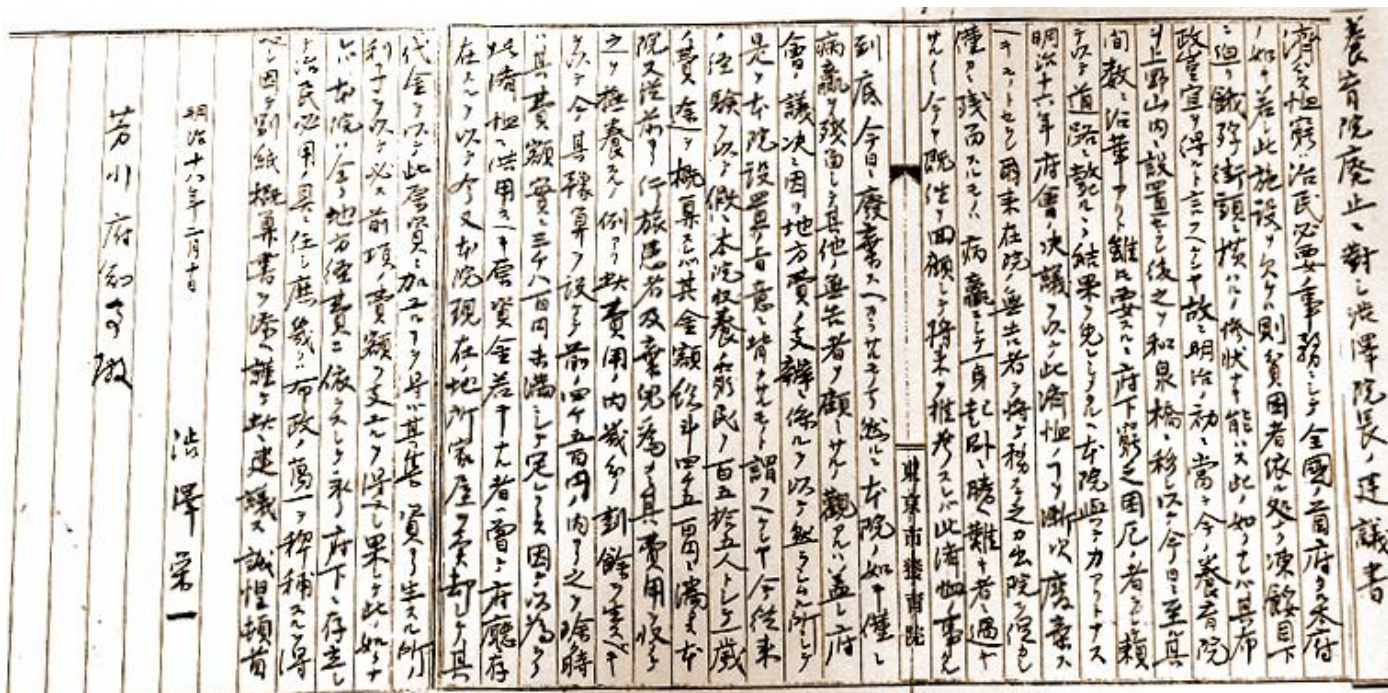
- 1845: 海防掛再編: 阿部正弘(川路聖謨、永井尚志、大久保忠寛、木村嘉毅)
- 1855: 海国図志を江戸で出版: 塩谷甲蔵、箕作阮甫、川路聖謨
- 1857: 病幼院創立意見: 蕃書調所総裁 大久保右近将監忠寛
- 1857: 長崎医学伝習所・長崎養生所: ポンベ、岡部永常長崎奉行
- 1858: お玉が池種痘所: 川路聖謨、伊藤玄朴...坪井信良、牧山脩卿
- 1860: 遣米使節・咸臨丸桑港病院体験: 牧山脩卿、福沢諭吉、(佐野鼎)
- 1862: 竹内遣欧使節、夷情探索: 箕作阮甫、松木弘安、福沢諭吉、佐野鼎、大久保一翁(忠寛隠居名)
- 1867: 徳川昭武パリ万博使節団(渋沢栄一、高松凌雲、A、シーボルト)

明治維新後

- 1869: 藩立駿府病院・沼津病院・沼津兵学校
- 1869: 救育所: 芝、麴町(七分積金による)
- 1872: 養育院(七部積金による): 大久保一翁、渋沢栄一
- 1873: 東京府病院: 大久保一翁、坪井信良、牧山脩卿
- 1874: 渋沢栄一...養育院の維持・運営、
- 1891: 渋沢栄一・慈恵会(東京府病院下取)の財政基盤確立



超現代語訳「養育院廃止に対する渋沢院長の建議書」



養育院廃止に対する渋沢院長の建議書 の歴史的背景

明治 5 年、静岡の徳川家(当主・家達。前將軍慶喜は謹慎中。)を支えていた大久保一翁は、静岡藩中老一権参事を務めていたが、明治 5 年の廢藩置県により、家達とともに上京。文部省 2 等出仕を命じられ、すぐに東京府知事に任じられた。

七部積金の用途は大蔵大輔の井上馨の内諭により、都市基盤の整備などにも使用できるようになっていた。

大久保知事は營繕會議所に対して、明治 5 年の 9 月に救貧策を諮問し、10 月には救貧三策の答申を得、そのひとつとして、恒久的救貧施設『養育院』の建設に至った。上野の護国院の一部を買収し、増改築し、翌年 2 月にはオープンしている。この間、ロシアのアレクセイ王子が国賓として訪れたが(このときの外務・内務卿で接待の責任者は、幕末の 4 賢候の一人宇和島藩主の伊達宗城)、東京の街を浮浪者が徘徊するのは文明国の恥と言うことで、浮浪者を駆り集め、旧加賀藩の空き長屋に集められ、浅草の長谷部善七(直前のエタ解放令により

自由人となり長谷部を名乗る)に委ねられ、5 日後に浅草溜めに移された。

明治 6 年 2 月には上野の養育院施設が完成し、恒久的救貧施設としての運用が始まった。

明治 9 年まで、養育院は營繕會議所(旧・町会所)で、共有金(旧・七部積金)を運営費に当てていたが、明治 9 年 6 月には東京府の経営となった。大久保府知事退任後の明治 12 年、上野には博物館や公園を作る計画となり、養育院の拡張計画は阻止され神田の藤堂邸あと(現・三井記念病院の近く)に追いやられた。さらに、府会の決議により、貧しい人の施設に税金を使うのは無駄だと言う論議が出された。

明治 7 年以来、大久保府知事に共有金の使途を任せられ、明治 8 年には、養育院事務長として運営を担ってきた渋沢は、これに抵抗したが、明治 13 年、税金の支出はとめられた。

養育院の存続を願う渋沢は、それなら俺が経営を・・・と
言う府知事宛の手紙がこれである。そして、伊達宗城（
元外務卿）、松平定教（定信の後継者）、橋本綱常（橋
本佐内の弟で、東大教授・日赤病院長・軍医総監）、財

界人の三井三郎助、青地四郎左衛門、大蔵喜八郎、川
村傳衛らを集めて養育院委員会を作り、寄付集めに奔
走し、養育院の存続に尽瘁するのである。

此の府知事に当たった渋沢の養育院に対する思いがあふれる手紙は、養育院の最も重要な基本文書であ
り、現在は東京都公文書館にある。原文を活字に書き起こしてみたが、それでも現代人には難解なので、超
現代語訳を付した。（稲松孝思）

濟貧恤窮ハ治民必要ノ事務ニシテ、全国ノ首府タル本府ノ如キハ若シ此ノ施設ヲ欠ケバ則貧困者依ル処
ナク、凍餒目下ニ迫リ餓殍街頭ニ横ハルノ惨状ナキ能ハス。此ノ如クナレバ其ノ布政豈適宜ヲ得ルト言フ
ベケンヤ。故ニ明治ノ初ニ當テ今ノ養育院ヲ上野山内ニ設置セラレ、後此レヲ和泉橋ニ移シ以テ今日ニ
至ル。其間数ニ沿革アリト雖モ要スルニ府下窮乏困危ノ者ヲシテ頼テ以テ道路ニ斃スルノ結果ヲ免レタル
ハ本院興テカアリトナス。明治十六年府會ノ決議ヲ以テ此ノ濟恤ノカヲ漸次廃棄スベキモノトセラレ、爾
來在院ノ無告ノ者ヲ將ニ務メテ之レガ出院ヲ促シ僅カニ残留セル者ハ病羸ニシテ一身起臥ヲ危難キ者ニ
過ギザルヲ今ヤ既往ヲ回顧シテ将来ヲ推考スレバ此ノ濟恤ノ事、到底今日廃棄スベカラザルモノナリ。然
ルニ本院ノ如キ僅カノ病羸ヲ残留シテソノ他ノ無告ノ者ヲ顧ミザル觀アルハ蓋シ府會ノ議決ニ因リ地方費
ノ支弁ニ係ワルヲ以テ然ラシムル処ニシテ此レヲ本院設置ノ旨意ニ背カザルモノト謂ウベケンヤ。今從
來ノ經驗を以テ仮ニ本院収養ノ窮民ヲ五百五十人トシテ、一歳ノ費途ヲ概算スレバ、其ノ金額總計四千
五百円ニ滿タズ。本院マタ從前ヨリ行旅患者及ビ棄兒ノ為其ノ費ヲ収メテ此レヲ撫養スルノ例アリ。此ノ費
用の内〇のカク余ルヲ生ズベキヲ以テ今其ノ予算ヲ設ケテ前ノ四千五百円ノウチヨリ余リシ時ハ、其ノ費
額實ニ三千八百円未滿ニシテ足レリス。因ミニ以テナシタル此ノ濟恤ヲ供用スベキ原資金若干ナルモノ
ハ寡ツテ府府ニ存在スルヲ以テ今又本院現在ノ地所家屋ヲ売却シテ其ノ代金ヲ以テ此ノ原資ニ加エルヲ
得ラバ其ノ集資ヨリ生ズル処ノ利子ヲ以テ必ズ前項ノ費用額ヲ支エ得ルベシ。果タシテ此ノ如クナレバ本
院ハ余リ地方經費ニタヨラズ、永ク府下ニ存立シテ治民必要ノ具ニ任セ庶民ニハ府政ノ万一裨補スルヲ
得ルベシ。因テ別紙概算書ヲ添エ謹ミテ此ヲ建議ス。

誠惶頓首 明治十八年二月十日 渋沢栄一 芳川府知事殿

養育院廃止に対する渋沢院長の建議書 超現代語訳

貧しい人を助け、苦しむ人を救うのは、社会を維持するうえで必要な政治の仕事です。首都東京にこの
ための施設がなければ、貧しい人は頼るところがなく、街角で飢えて凍えて死ぬ人が出るのはやむをえ
ないでしょう。このため、明治の初めに上野に養育院が設置されました。養育院はその後神田の和泉橋
の所に引っ越し、今日に至っています。その間に收容人員はいろいろ変わっていますが、東京の貧しい
人は頼りにしていて、街頭で亡くなる人がいないのは養育院のお蔭です。明治 16 年に府会は、この人を
救う力となっている施設を、漸次、無くするように決議し、在院者を出院するように仕向け、わずかに残っ
た人は寝たきりの弱った人達だけでとなりました。過去のことを思い起こし、将来のことを考えると、無くし
てはいけない施設なのです。それなのに現在の当院の様に府会の決定で、物言わぬ困窮者を顧みず、
税金を浪費するからと言って無くしてしまうのは、養育院を創立した趣旨に背いています。これまでの経
験から、仮に收容者を 155 人とすると、一年間の費用を見積もっても、4,500 円に満たません。また、養育
院は街頭の病人、捨子を收容して保護してきましたが、上記の金額を超えても 3,800 円未滿です。府の管
理する共有金・土地の売却・寄付金などの利息だけでこれらの資金は賄うことができるのです。こうすれ
ば地方税にあまり負担をかけないで永く人々を支える施設を運営することが出来ます。このように考えて
別添の概算書を付けて養育院の存続を提案いたします。

明治 18 年 2 月 10 日 渋沢栄一 芳川府知事殿

東京都健康長寿医療センター
養育院・渋沢記念コーナー
連絡先: 老年学情報センター

宮本孝一(老年学情報センター)

幻の初代院長

明治5年
開設

養育院開設(院長職無し)
養育院院長 飯田直之丞
養育院事務長 渋沢栄一

明治

初代院長
渋沢栄一

大正

昭和

第2~10代院長
十時 尊 田中太郎 川口寛三
松永和三郎 落合慶四郎 大倉喜七郎
三好 毅 上平正治 磯村英一

太平洋戦争

第11~20代院長
黒川義男 東条忠三郎 人見捨蔵
金子吉栄 小松藤吉 菊池昌直
青草貞雄 江口美知男 大竹武三
朝日仁一

東京都老人総合
研究所と養育院
附属病院を開設

第21~30代院長
吉田千秋 本田幸雄 齊藤好男
野木義美 常陸昌晃 初沢喜久夫
石崎富江 井上修一郎 柏木和子
川上菊夫

附属病院が東京
都老人医療セン
ターに改名

第31・32代院長
辰川弘敬
茅野祐
高齢者施策推進室長

平成

平成12年
養育院廃止

平成21年
東京都健康長寿医療センター

【参考】
東京市養育院編「養育院六十年史」1933
東京都養育院編「養育院八十年史」1953
大植四郎編著「明治過去帳：物故人名辞典」
1988

この図は、明治五年の養育院開設から、平成十二年の養育院廃止(東京都の養育院廃止条例)までの、歴代院長の在任期間です。
約百三十年にわたる養育院史における、渋沢栄一院長の存在の大きさがよくわかります。
渋沢栄一は亡くなるまで院長に在任していました。その後は、東京市・東京都の職員が養育院長に就くようになり、一年の途中で交代することがあったためです。
さて、歴代院長というと初代は渋沢栄一とされていますが、実はその前に院長に任命されていた人がいました。飯田直之丞という人物です。

飯田直之丞を養育院長に任命

西川明治六年
癸酉(みずのとりの)年

酉
一月
八日

右養育院長申付候間諸事不取締無之様實精可相動候也

月給金貳拾圓

飯田直之丞

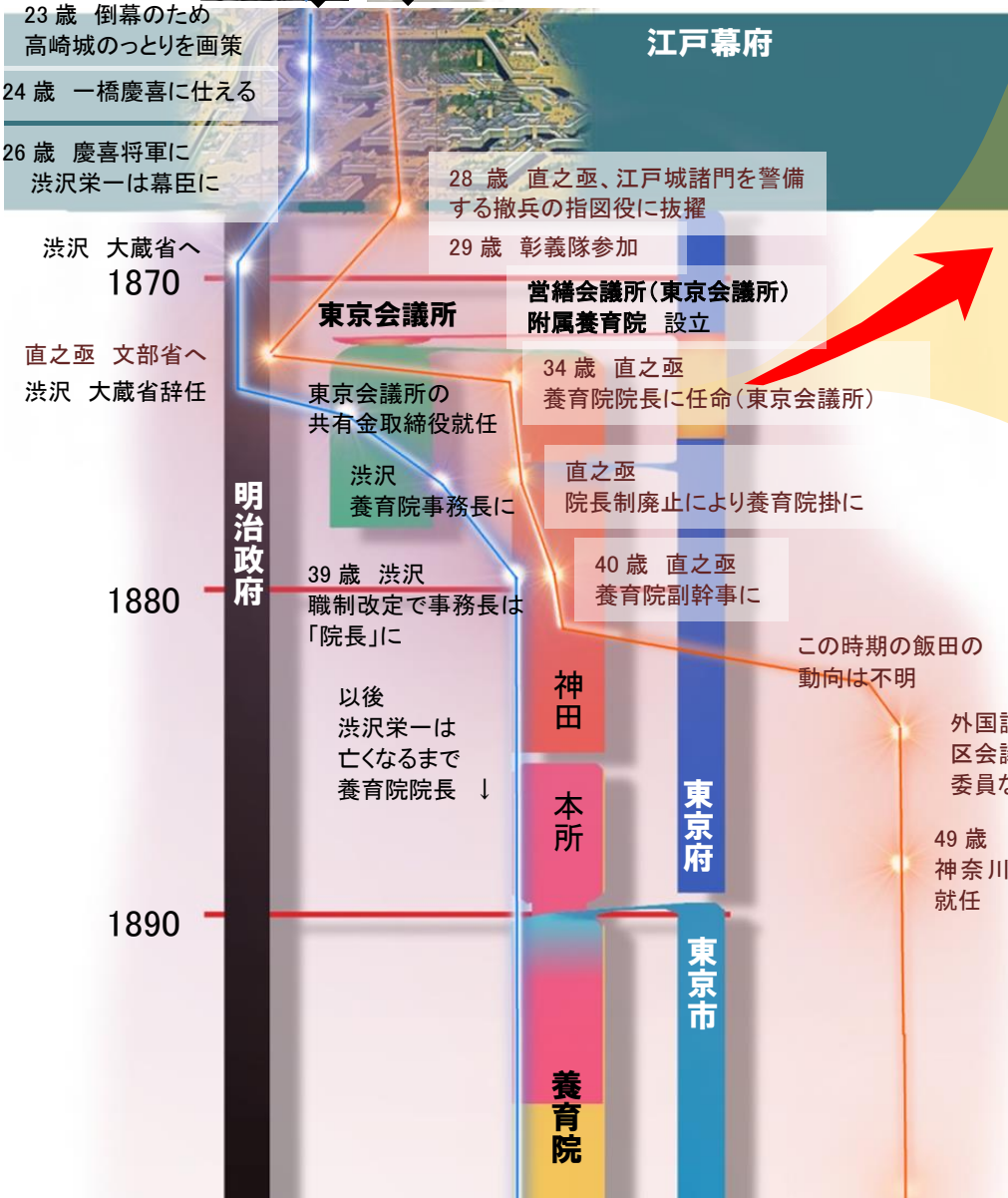
會議所

渋沢栄一



飯田直之丞

(写真無し)



明治五年開設当初の養育院は臨時收容所で「院長」職はありません。

翌年の上野移転前に東京会議所内に院長職を設けることが決まり、呼び出されて明治六年一月に任命されたのが飯田直之丞でした。

渋沢栄一が養育院事務長・院長になったときも、養育院掛・副幹事として養育院運営に携わっていました。

養育院六十年史などの年史は、飯田直之丞の院長職は、**渋沢栄一以降の院長職とは職制の性質が違う**としています。そういう見方があるためか、**初代院長渋沢栄一**が今は一般的なイメージとして定着しています。ただ、飯田直之丞院長の職務内容や権限について語る歴史史料は、今現在にも見つかっていません。

渋沢栄一の院長就任後も養育院の運営に関わっていた飯田直之丞は、創立以来どのような役割を担ったのか。養育院史で語られることのない、幻の初代院長です。



墓は、渋沢栄一と同じ谷中霊園に